相川は笑ひながら、

『はゝゝゝゝ。そりや聞くがものはないぢやありませんか。ねえ、京枝さん。あんたはまだ知らねえかも知れねえが、このお歌さんはお氣の毒だが、もう私の女房と身分の極つた人なんだ。誰れが何んと云つたつて、私やもう指一本だつてさゝせねえから、どうかお歸んなすつたら、今戸さんによろしく仰有つて下さい。今戸さんがへまな賣込み方をしたお庇護で、私やとんでもねえ結構な拾ひものをして大きに嬉んでゐるとさう云つて下せえ。はゝゝゝゝゝ。』

二十一の十九

それまで默つて二人の話を聞き入つてゐた島田は、その時、うすく笑ひながら口を出して、

『おい、京枝さん。あんたの方の紛糾はどういふんだか知らねえが、そんな調子で押していつたつて、とても勝味はないよ。相手が悪いんだもの。端で聞いてゐても自烈ッ度くなつて來るぜ。』と云つて、又煙草に火をつけながら、『ねえ、相川さん。京枝さんの方の口は、とても一時間や二時間ぢや纏まりさうもなさゝうですから、どうか私の方から先に何んとか形をつけて頂きませうか。私も先を急ぐ體ですから、うか〳〵しちやゐられねえんでねえ。』と、不逞な調子でいふ。

相川は今度はそつちを向いて、

『いや、どうも放つて置いて濟みません。』と、云つて、『だが島田さん。あんたの方で私の云ひ分を徹させて下さらなけりや、もう妥協の餘地はねえものと思つて貰ひませうか。いくら何んだつて、今になつて莫大な手切金なんか取られちや、私の顏にも拘はりますからなあ。まあ、今云つたやうに、何處かへ高飛びをなさる草鞋錢位なことなら、私も溝へ捨てた氣で出しますがね。はゝゝゝ。』

島田はさう云はれると、急に險相な顏になつて、

『ふん、笑談ぢやねえ。まあ、その樣子ぢやどうせ素直にや云ふことも聞いちや呉れますめえようがす。それならそれで又私の方にも仕樣がありますから、どうかまあとで後悔なさらねえやうにお願ん申しますぜ。たつた五十や六十の金で追拂はれる位なら、何にも頭を下げて恥をかきにや來ませんや。かうやつて昔の情人の前で横ッ面撲られて引退るからにや、私だつて、それ相應の御返禮もしなけりや、あんまり素人らしいからね。はゝゝゝゝ。』と、云つて、京枝の方を向きながら、『おい、京枝さん。あんたぢやとても齒が立ちやしねえから、今日のところはまあこのまゝ一緒に歸らうぢやねえか。私もあんたの今の話を聞いて、どうやら仕事になりさうだから

これから歸りに飯でも食ひながらゆつくり話を聞いて、そのうへで何んとかお力にならうぢやねえか。私もかうなりやどうせ捨て鉢だ。他人の喧嘩を買ひ出してゞも何んとかして仇をしなけりや、納まれねえからね。』と、いふ。

京枝は一寸考へて、又相川の方をみながら、

『旦那、私や決して此方のお爲めにならないやうなことを申しに伺つたんぢや御坐んせんから、どうかもう一度考へ直して頂けませんでせうか。折角かうやつて足を運んだんで御坐んすもの、ちつとは私の氣も買つて頂かなけりや、歸るにも歸られないぢや御坐んせんか。お歌さん、お前さんだつてさうだよ。そんなに默つてばかしゐないで、何んとかお云ひな。』と、つん〳〵しながらいふ。

相川はそれを自分で引取つて、

『いや、京枝さん。お氣の毒だがもう一度お歌さんを今戸さんの前へ出せといふなあ、どうせ出て來ねえ相談だよ。自分の女房と極つた女に、そんな器量の惡い目を見せるのは、私の恥だからねえ。』と、てんで相手にしないやうに云つて、相川は又煙草を取上げた。

二十一の二十

京枝はそれからもいろんなことを云ひ出して、何うかして相川を說き伏せようとしたが、相川は益〻頑强な態度になつて、終ひには返事もしずに唯横を向いてぷかり〳〵煙草ばかり吸つてゐる。

京枝もさうなると、ひどく腹立たしさうな顏になつて、今度はお歌の方へ眞面に向き直りながら、

『ねえ、お歌さん。お前さんは今戸さんのことばかしぢやない、お師匠さんのことでもお前さんはとんだ失策をしてゐるんだよ。お前さんが逃げてしまつたばツかりに、北海道の方の興行もすやになつてしまふ。お師匠さんはやれ、違約金の、やれ、雜用のツて、二百圓から上も損をして、それこそ一座は這々の體で東京へ逃げて歸つて來たんだよ。それからつていふものはお師匠さんは體を惡くしておしまひなさるし、此方の寄席へ出る段取はつかないし、ほんとに今ぢやお氣の毒な程困つて被居るんだ。それにお前さんばかりは涼しい顏をして、相川さんの女房で候もないもんぢやないか。ほんとにあんな義理知らずはないつて、お師匠さんは齒がみをして口惜しが

つて被居るんだ。それでもお前さんは寢覺めがいゝのかい。』と、顏中に昂ぶつた疳をみせながらいふ。

お歌はそれでも默つて、下を向いてゐた。

島田は又京枝の肩を叩いて、

『おい、京枝さん。いくらお前さんが此處で啖呵をきつたつて、彼方ぢやびくともしやしねえよ。それだから今日のところは私に任せて、もう歸らうツたら。歸つて又出直す方がいくらか氣が利いてゐるか知れやしねえぜ。あとのことはこの私の方寸にあるんだから、却つて今惡跟きをすると事を壞してしまふからなあ。はゝゝゝゝ。』と、態とらしく笑つて、そゝくさ身支度をしながら、

『いや、相川さん。どうも飛んだお邪魔をいたしました。又改めて出直しますからその時にはどうかよろしくお賴ん申しますぜ。はゝゝゝ。』と、平氣な顏で座を立つ。

京枝も口惜しさうにまじ〳〵してゐたが、やがて續いて腰を持ちあげて、

『ほんとに憎らしいツちやない。お歌さん。覺えておいでよ。』と、云ひ捨てゝ、つん〳〵しながら玄關の方へ出ていく。

相川はそれでも二人を送り出しながら、

『いや、どうも妙なことで話がばれになつてお二人ともほんとにお氣の毒でしたよ。又そのうちに何うにか風向きが變つたら、このまゝでも濟まされますまい。どうか貴方がたの方も何んとか考へ直して、まあ、穏かに話のつくやうにこのうへとも、御盡力を願ひますよ。』と、おとなしくいふ。

島田は靴を穿きながら、

『いや、どうも御挨拶で恐入りますよ。さう落着き拂つてゐられちや齒が立たねえが、併しまあ、どうか足許から火が出ねえやうに、その御用心だけはよろしくお願ひ申しますぜ。私も今度來る時にや今日みてえなだらしのねえ引退り方はしませんから、どうかその御覺悟でね。はゝゝゝ。』

島田はさう云ひながら凄味な眼つきでぢろりと相川の顏をみて、それなりぐづ〳〵してゐる京枝を促して歸つていつてしまつた。

二十二の一

島田と京枝が歸つていつてしまふと、相川は間もなく店の方で急用が出來て、そのまゝお歌一人を殘してそつちへ出ていつたが、やがてその客を歸してしまふと彼は又元氣のいゝ顏をしながら茶の間へ歸つて來て、

『お歌さん、とんだ奴に飛び込まれたんで、晝飯にも有りつけないで、私やひどく腹が減つたよ。どうだい、これから早間で何かさう云はせて飯にしようぢやないか。』と、いふ。

お歌は先刻のいさくさで、すつかり氣を腐らせて、もう飯を食べる勇氣なぞは更にないやうに、

『え、さうしてもよう御座んすけれど、私何んですか、ちつともお腹が空きませんのよ。』と、云つて、

『ねえ、貴方、それよりも、二人があゝ云つて歸つたんですから、又この後はきつと面倒になるんで御座んせうねえ。私それを考へると、全く貴方にお氣の毒で、かうしてゐても、何だか胸がどき〳〵して、ちつとも落着ませんのよ。ほんとに何うなるんでせうねえ。』と嘆息を吐きながら云ふ。

相川はお歌の傍へいつて、態と體をくツつけて坐りながら、

『いや、お歌さん。そんな意氣地のないことで何うするんだい。もうそんな心配をする必要は少しもありやしないよ。あんな捨て臺白を殘して歸つて行つたが、奴等に何が出來るもんかね。よしんば小生意氣な腕立てをした時に、私の胸にやもうちやんと膳立てが出來てゐるんだもの。決して氣に懸けることはありやしないよ。私や今夜ひとつ安田の處へいつてとつくり相談をして來るから、もうあんたもくよ〳〵しずに、氣を大きく持つ方がいゝさ。どうだい、それぢやこれから元氣づけに一杯やらかさうか。はゝゝゝゝ。』と、大きな口を開けて笑ふ。

お歌はそれでもまだ氣が濟まないやうに、

『でも、ねえ、貴方、これがあの島田一人のことなら、私もさう心配はしないんですけれど、京枝さんとあの人と同類になられちや、それこそ何をやり出すか知れたもんぢや御座んせんわ。そのうへどうせ今戸さんもこの話を聞いてひと口乘るでせうし、さうなつたら私はほんとに手も足も出なくなつてしまひますわ。そりや私はもう何うなつたつて構はない體ですけれど、いつも云ふ通りひよつとかして貴方に何か御迷惑がかゝりでもすると、私全く生きてゐる瀬がないんですもの。私そればつかりが氣になつてねえ。』と、涙聲になつていふ。

相川はお歌の肩へやさしく手をかけて、
『お歌さん、又それを云ふ。あんたも實に水臭い人だねえ。そんな迷惑、迷惑つて云はれると、私や妙な風に感繰るよ。まあいゝさ。そんなに氣を滅入らせねえで一杯やらかさう。酒でも飲んだらちつたあ氣丈夫になるだらうから。』と、云つて、彼は手を拍いてお浪を呼んで、直ぐ樣、酒の支度を命じた。
お浪は畏まつて臺所の方へ下つていつたが、それと殆ど同時に、店の方からは一人の小僧がばたゞ此方へ驅けて來て、向ふの緣端のところから大聲で、
『旦那、お電話でござんすよッ。』と、怒鳴る。
相川も不意だつたので、悸乎としたやうに顏をあげて、そつちをみた。

二十二の二

相川は小僧の方を差覗くやうにして、
『おい、半造、お前何んだ。そんな大きな聲をして。』と、たしなめるやうに云つて、『誰れからの電話だ？　又店の用なら安西か誰れかに聞いて貰ひな。』と、いふ。

と、半造は簾の蔭から顏だけ出して、
『旦那、お店の用ぢやないんで御座んすよ。何んですか名前を仰有つてゐるんですが、電話の工合が惡くてよく聞き取れないもんですから。』
相川は一寸考へて、ぶッきらぼうに、
『男の聲か？』と訊き直す。
と、半造は合點いて、
『え、さうで御座んす。聞き馴れないお年寄りの聲で、何んでも塚越とか何んとか仰有るやうなんで御座んすが、よく聞き取れないんで御座んすよ。』と、いふ。
相川はそれを聞くと、
『塚越？　知らねえ名だなあ。誰れだらう。』と、口の中で呟いてゐたが、やがてすつくと立ち上つて、そのまゝ電話室の方へ出ていく。
お歌はその後姿を見送つてしよんぼり深い思ひに沈んでゐたが、場合が場合とて、電話ひとつにも不安な思ひが湧くとみえ、彼女の顏は漸次と引緊つて來て、店の方の物音にじいッと耳を澄ますやうに、眼を据ゑてゐた。

やがて少時すると、相川は妙に浮かない面色をしながら又茶の間へ歸つて來て、默つてもとの座へすわつてしまふ。お歌は丁度その時、お浪が支度をしてもつて來た銚子の燗をしながら、上眼でそつと相川の顏色を窺つてゐたが、あんまり話の繼穗がないので、

『ねえ、貴方、何誰からのお電話でして？』と、靜かに訊く。

と、相川は笑ひもしずに、

『いや、お歌さん。塚越だなんていゝ加減な名を云ひやがつて、實はお園なのさ。何んだか今日も彼奴あひどく醉つてゐやがつて、何を云ふんだか、まるで取止めがないんだよ。』と、いふ。

お歌もお園と聞くと、顏を伏せて、

『まあ、お園さんからなんですの。』と云つたッきり、もう何んにも云はなかつた。

相川とお歌はそれから夕方まで飲みつゞけて、もう八時頃になつて、店屋ものゝ料理を取寄せやつと飯を濟ましたが、二人して焙じた番茶を飲んでゐると、その時戸外の方からお浪が慌たゞしく歸つて來て、茶の間へ入つて來ながら、

『ねえ、旦那、あの、大變で御座いますよ。私一寸そこまで買物に參りましたら、今そこの露路のところでばつたり先達の浪花屋の伸に打衝かつてしまひましてねえ。きつと又芳町の姐さんが

おいでになつたに違ひ御座いませんから、何う致したらよう御座いませう。』と、息を切りながらいふ。

相川もお園が來たと知ると、何うしたのかいつになく顏色を變へてしまつた。

その時、玄關の處では、誰れかがどしりと格子戸へ體を倚せかけるやうな物音が聞えて來た。

二十二の三

玄關の格子戸はやがてからりと開いて、三和土を踏む下駄の音がかたことゝ鳴り響いたかと思ふと、お園は案内も乞はずに、いきなり上り框の葦戸を開けて家の中へ上つて來る樣子である。

それと知ると、相川はひどく慌てゝ、お歌の方へ眼まぜをしながら、

『お歌さん、かうしちやゐられねえ。兎に角店の方へ逃げようぢやないか。今彼奴に踏捕まつちや。……』と、云ひさして、そのまゝすつくと立上りながら、先づ自分から先に廊下の方へ遁げてゆく。

お歌も取るものも取敢へぬやうに立つて、そゝくさ足音を忍びながらその後を追つていつた。

お浪も眼を宙にして、思はず二人の後へついてくる。

相川は店へ來ると、お浪の方を向いて、
『お浪、俺等はうまい工合にずらかるから、お前あとをよろしく頼むぜ。今夜お園の奴に捕まると、俺あもう手も足も出ねえことになるんだから、氣の毒だが、何んとかして彼奴を歸してしまつて呉れ。お前ひとりでどうしても手におへねえやうだつたら、誰れか店の奴を頼んでな。』と、そは〳〵しながらいふ。
お浪は心細さうな顏になつて、
『でも、私、もう此間の晩で懲りて居ますから、今夜は婆やさんに出て貰つても・ふう御座んせう。私姐さんが醉つて被居ると、どうにも扱ひやうがないんで御座んすもの。』と、いふ。
相川は合點いて、
『いや、そんなら婆やでも誰れでもいゝさ。さうして早く、あの餉臺を形づけてな。』と、云ひ捨てゝ彼はもう心もそこにないやうに、
『さ、お歌さん、うつかりしてゐちや駄目だよ。何かのことは外へ出てから話すから、貴女も誰の下駄でも構はねえ、有合はせの奴を突ッ懸けて、早く戸外へ出て下さいッたら。』と、いつて、自分はもう店の扉口の方へ出ていく。

お歌も何だか、後から追ひかけられるやうに、ぞうッとして直ぐさま小僧の下駄らしいぴたんこな日和下駄を突ッ懸けて、慌てゝ戸外へ出てしまつた。
二人はやつとのことで大通りまで出てくると、ほッとして、そこの角のところで立止まりながら、相川は、
『あゝ、ほんとに突如に飛んだ目に逢はせやがる。それでもうまく遁げおふせて、何よりだつたよ。』と、云つて、息を入れながら、ほんとに今夜お園の奴に踏捕まつたら、それこそもう形なしさ。併しお取り膳で飯をくつてゐたあとがあのとほり歴々と殘つてゐるんだから、ちつとまづいなあ、奴め何うしやがるだらう。』と、妙に不安さうにいふ。
お歌も息を彈ませて、
『ほんとに私もまだ胸がどき〳〵してゐますのよ。』と、云つたが、相川は笑つて、
『はゝゝゝ、まるで殺されでもしさうな騒ぎだね。まあ、いゝ。とにかく二三十分そこいらをぶらついて歩いてゐるうちにや、いくらお園でも歸るだらう。まあ、歩きながら話さうよ。』と、云つて、彼はやがて靈岸橋の方へ向つて、ぶら〳〵歩いていつた。
空にはその晩は片割月が寂しげにかゝつてゐた。

二十二の四

お歌は寂しさうな月影を眺めながら、

『ねえ、貴方、それにしても、一體、お園さんは何うする心算で、貴方にそんなに煩くまつはるんでせう。此間のお話の方はまだうまく纏まらないんで御座んすか。』と、訊く、

相川は多少氣拙さうな樣子で、

『いや、纏るも、纏らないも、お園があれぢやてんで駄目ぢやないか。逢つて吳れつていふ時にや、きまつてあの通りぐづ〳〵に醉つてゐやがるんだもの。手がつけられやしないさ。』と、云つて、下駄先にかゝる礫を踏散らかしながら、『それに今夜だつて、あの通りな樣子なんだもの。せめて少しでも性根があつて此方の云ふこともよく聞き分ける位な醉つぱらひなら私だつて決してこんな薄情な扱ひはしやしないさ。電話口へ出りやもうわツと泣いてかゝるし、此方で嚙んでくくめるやうにやさしく云つてやりや、反對に嵩にかゝつてがみ〳〵怒鳴りやがるし、實際もうどうにも仕樣がないんだもの。先刻だつて電話口で、もう私や今夜何んとか話をきめて下さらなけりや死んぢまふつてわあ〳〵泣くんだもの、何處から電話をかけてゐやがるんだか知らねえが、

全くあれぢや先の家へも外聞が惡いぢやないか。』

お歌も一寸相川の方をみて、

『まあ、死ぬはよう御座んしたわねえ。もうあの人も、お酒ですつかり頭が變になつてしまつてゐるんですわねえ。』と、云つて、聲を落しながら、『ねえ、貴方、それで結局は貴方、どうなさるおつもりなんですの？　いつまでもかうやつて置いたら、あのお園さんのことですもの、ほんとに氣でも狂やしないかと思つて、私、それが心配なんですわ。何んとかして、早く話のつけやうはないもんでせうかねえ。』と、相川の方へ肩を摺り寄せながらいふ。

相川は顏を伏せて、

『いや、そりや私の方にだつて、ちうすつかり敵立は出來てゐるのさ。實際のことを白狀すると私や全く今迄あゝした關係になつてゐたんだから、このまゝ押放り出してしまふのもあんまり可哀想だから、いつそこゝで彼奴の借金をすつかり拂つてやつて、彼奴の性根次第ぢや、これからまあ、食べるに困らないやうに、小待合の一軒も持たせてやらうかとかう思つてゐるんだが、何にを云つても當人があれぢや、此方からその相談を切り出す譯にもいかないし、私にしたつて、實際のところ始末に困つてゐるんだよ。さうしてやりや私やまあ、人前へ出たつて、薄情呼ばは

りはされないで濟むからなあ。』

お歌も合點いて、

『さうですともさ。さうやつて末始終を見屆けておやんなさりや立派なもんですわ。それならそれで、早くそのことをお園さんにさう云つて聞かせたらいゝぢやありませんの。さうすりやあの人だつて、性根がつくだらうと思ひますわ。』と、さも思ひ入つてゐるやうに云ふ。

相川も急に默り込んで、何かしきりに考へに沈んでいつた。

二十二の五

相川は少時すると、ふつと顏をあげて、

『いや、私だつて、なることなら一日も早くお園にその話をして、どうかして形がつくものなら器用に形をつけてしまひ度いと思つてゐるんだが、併しあゝ何うも嵩にかゝつて來られると、これで妙な男の意地が出て來るもんでねえ。何を云つてゐやがるんだ、手前がさういふ了見なら俺だつて何にも有り餘つてゐる金ぢやねえんだ、そんな胸ッ糞の惡いことを云ひやがりや乞食にでも呉れてやる方が氣が利いてるつてな心持ちにもなるんだねえ。』と、苦笑ひをしながらいふ。

お歌はそれを遮つて、

『貴方、それが可けない了見なんですわ。そりや貴方から云やあいろ〳〵また文句もあるでせうけれど、でももとを糺せば決して此方だつていゝとばかりは云へませんし、お園さんの心持ちにだつて全く氣の毒なところもあるんですもの、そこも察して上げなけりやねえ。ですからねえ、貴方、もう兩方で意地にならずに、こゝで穩かに話合ひをつけてしまつたら、如何でせう。』と、云つて、一寸言葉を切りながら、『それで一體あのお園さんには幾らばかし借金があるんですの？』と、眞面目になつて訊く。

相川も何處かしんみりした調子で、

『さあ、此間聞いた時には、二千圓ばかしのやうに云つてゐたが、併し此頃のやうな身持ちぢやもうとてもそれ位なことぢや追付くまいと思ふよ。それに待合でも出させるとなると、何うしたつて取纏めてこゝで六七千圓の金を出してなけりやならないからねえ。』

『まあ、六七千圓ですつて？　六七千圓て口でいふと何んですけれど、それぢや隨分大變ですわねえ。あの人と手を切るだけに、そんなにお金が出ちや幾ら貴方だつて耐まりませんわねえ。もつと少しのお金で何うにかする譯にはいかないもんでせうか。』

『さあ、それがさ。彼奴にもつと性根があると、私のやるだけのものをネタにして、自分でも少しは何うにかしようツていふ氣にもなるだらうから、さうすりや又此れで私も助かるのさ。私だつてない譯ぢやないんだから、心持ちよく出さしてさへ呉れりや、兎に角、五千六千と纏まつても決して糸目はつけやしないんだが、何を云つたつて、あゝどうも食ひ醉つてばかしゐやがつちや全く張合ひがないもの。』

お歌も合點いて、

『さうねえ、私や又三千圓もありや何うにかなるんだらうと思つてゐたんですけれど、そんなにかゝつちやねえ。』と、云つて、何んだか自分の身を責めてゐるやうに、

『ほんとにかうなつてしまふと、私にやとても口が出せませんわ。何も彼ももとを糺せば私が悪いんですから、そんなお話を聞くと、私や猶更貴方にお氣の毒でねえ。ほんとに何うしたらいゝでせうねえ。』と、云つて、少時の間じいツと眼を据ゑて考へてゐたが、やがて思ひ切つたやうに、

『ねえ、貴方、いつそそれぢや、私自分でお園さんに打突つて、向ふに當り障りのないやうに何んとか話をつけてみませうか。私、さうでもしなけりや全く居耐まれませんわ。』と、悄氣きつた聲でいふ。

相川は何んとも返事をしなかつた。

二十二の六

相川はやがて又お歌の方をみて、

『いや、併しお歌さん、そりやとても貴女の手にやおへないよ。あんなにいきり立つてゐるんだもの。貴女が顔を出したゞけでもお園の奴は何をするか知れたもんぢやないよ。まあ、觸らぬ神に祟りなしさ。かうやつて遁げてゐるのが一番利巧だよ。はゝゝゝ。』と、力なく笑ふ。

お歌はそれでも一生懸命になつてゐるやうに、

『だつて貴方、もし旨い話にならなかつた時に、もと〳〵ぢやありませんか。私や頭の三つや四つ打たれたつて、構やあしませんから、とにかく一度お園さんに逢つて、私から話をしてみようぢやありませんか。私なら昔からお園さんの氣性もよく知つてゐるんですし、それに今考へてみたら、どうやらうまくやれさうな氣もしますから、ねえ貴方、どうかこの役は私に勤めさして下さいましな。せめてさうでもして、貴方のお役に立たなけりや私、何んぼ何んだつてあんまりですからねえ。』と、熱心に云ふ。

相川もさう云はれると、何か思ひ直したとみえ、
『ふむ、さう云はれてみると、何んだか私も貴女に任せてみ度くもなつて來るねえ。ひよつとしてうまく行きやこれより好都合なことはないからねえ。それにまだ今戸さんの方の一件も殘つてゐるんだし、島田の方だつてどうせあのまゝぢや濟みつこないんだし、私もこれで中々大變さ。一つ體で彼方も此方もツてえ譯にもいかないから、いつそ、お園の方の口はあんたにお願ひするか。』
お歌はせつかけるやうに、
『さうなさいましよ。それが一番よう御座んすわ。私、うまくいくか何うか分りませんけれど、あの人の氣性として、此方から泣いて懸りや案外ころりと參つてしまふかも知れないと思ふんですわ。何を云つたつて、私とはもう見習ひの時分からの交ひなんですものねえ。』と、云つて、お歌はいつの間にかもう永代橋の際まで歩いて來てゐるのに、驚きながら、『ねえ貴方、それぢや大急で家へ歸つてみませうよ。さうと極まりや却つて今夜の方が都合がよう御座んすから。』と、そこへ立止つてしまふ。
相川もやつとその氣になつて、二人はそのまゝ踵を返して又靈岸橋の方へ引返してきたが、相

川は袂を搜つて、
『ふ、あんまり慌てゝ私や煙草を忘れて來ちやつたよ。こいつあちつとドヂだつたなあ。』と、いふ。
お歌はその顏をにつこりしながらみて、
『貴方、煙草をあがり度いんですの。そんならよう御座んすわ。私が今買つて來て上げますから……』と、云ひ捨てゝ、彼女は小走に向ふの町へ走つていつたが、やがてとある大きな會社の隣りにある煙草屋から敷島を一つ買つて又此方へ歸つてくる。二人はそこで立止つて各自一本づゝぬき出して、火をつけると、さもうまさうに、ぷかり〳〵と吸ひながら南茅場町の方へ歩いていつた。
間もなく二人は家へ辿りついたが、そこの靈路口には案の定まだ浪花屋の俥が待つてゐた。二人はこつそり足音を忍びながら玄關先へ歩み寄つて、息を凝らして家の内の樣子を伺つたが、何うしたものか、四邊はしんとしてゐて人聲さへ聞えない。不審に思つて、相川は今度は肱懸窓の方へ近寄つていつたが、その時、ふつと人のうん〳〵呻くやうな聲が茶の間と覺しい邊から斷々に聞えて來た。

二十二の七

相川はその異様な聲を聞きつけると、猫のやうに耳を立てゝ、猶ほも様子を窺つてゐたか、お歌もそれが氣になるとみえ、こつそり相川の肩へ手をかけて、その耳へ囁くやうに、

『ねえ、貴方、あんなに呻つてゐるのはお園さんでせうか。』といふ。

相川も小首を傾げて、

『さあ、どうもさうらしいが、何うしやがつたんだらう』と、云つて、もう一歩窓の方へ近寄つていく。

お歌も影のやうに又相川の方へぴたりと體を寄せかけて、

『隨分苦しさうな聲ですわねえ。いくらお酒を飲むつたつて、あんなになるまで飲まなくつてもよささうなもんですわねえ。ほんとに仕様がない人ですわねえ。あれぢやいくら逢つたつてとても話なんか出來さうもありませんわ。困りましたわねえ。』と、相川の顏をみながら眉を顰める。

相川は何やら心配さうに、

『併しどうも醉つてゐるにしちや、あんまり呻り方が大業ぢやないか。奴め又僞せ癪でも起してゐやがるんぢやないかな、それだとお歌さん、これで一寸警戒を要するぜ。』と、苦笑ひをして、何うかして障子の隙間から中を覗いてみようとする。併しそこには大きな八ツ手の葉が一杯に伸びてゐるので、うつかりすると物音を立てる恐れがあつた。

そのうちに呻り聲の合間に、お園は、

『うむ、苦しい。お浪さん、お浪さん、水をお呉れ、水を……。』と、啜り泣くやうな聲でうめくのがかすかに聞えて來た。

お浪は側で介抱してやつてゐるとみえ、何やらごと〳〵云ひながら、臺所の方へ立つていくらしかつた。

お歌はやつと腹を極めたやうに、

『ねえ、貴方、かうやつてゐても仕様がありませんから、兎に角、私一人で家へ上つてみますわ。醉つてるんなら醉つてるで、又私仕様がありますから。』といふ。

相川はそれを危むやうに、

『さあ、だがどうもこの隨梅ぢや少々形勢不穩だね。奴め、あれでいろ〳〵魂膽をめぐらして、又僞癪で家の奴を手古摺らしてゐるらしいから、うつかりしたことをやらかすと、却つて藪蛇だ

ぜ。まあもう少し此處で様子をみてゐよう。』と、いふ。

お歌もさう云はれると仕方がなしに默つて又内の様子を窺つてゐたが、少時すると、今度はお浪の聲で、

『さあ、姐さん、しつかりして下さいましな。あれ、そんなことをなさるとお水が零れてしまふぢやありませんか。』と、さも持て餘してゐるやうな、泣きさうな調子で云つてゐるのが漏れ聞える。

お歌はもうじつとしてゐられないやうに、

『ねえ、貴方、私構はないから、家へ上つてみますわ。こんなことをしてゐたつて埒が明きやしませんもの。』と、云つて、そのまゝ一人で玄關の格子を開けて、それでもおづ〳〵家へ上つていつたが、と、間もなく茶の間の入口の方から、お歌が、突如に、

『あれ、貴方、貴女！　早く來て來さいッたら、大變です！大變ですッ！』と、度外れな聲で叫ぶのが聞えて來た。

二十二の八

相川はその恐ろしいお歌の叫び聲で悸乎として、自分も開けッ放しになつてゐる玄關の格子からつついと内へ入つて、蹴放すやうに下駄を脱ぎ捨てながら大急ぎで茶の間へ上つてみたが、とみると、丁度そこの縁寄りのところには、お園が見るから狼藉な姿をして俯向けに打倒れた儘、體を海老のやうに拘率らせながら今にも絶え入るやうに激しく苦悶してゐる最中であつた。側へ寄つてみると、彼女は瀬戸ひきの洗面機へ顔を突込むやうにして、ぐッ〳〵と時をつくつては止め度もなく吃逆をしてゐる。その洗面器の中には何うしたのか、まるで烏賊の墨をといたやうな液體がしたゝかに吐かれてゐて、後から出てくるのは眞紅な鮮血であつた。

相川もさすがに蒼くなつて、おろ〳〵してゐるお浪に、

『おい、お浪、一體こりやどうしたんだ？』と、訊いたが、お浪はもう夢中になつてゐるやうに、

『旦那、ほんとにいゝ處へ歸つて被來つて下さいました。私、たつた一人でもう何うしようかと思ひまして。』と、云つて、さも氣味が惡さうに、お園の方をみながら、

『あの、姐さんは此方へお上りになると直ぐから、何んだか胸がお惡いやうに、ゲエ〳〵云つて被居いますんで、私、洗面器をもつて來ましたら、そのまゝ横にお寢つちまひまして、先刻からしつきりなしにあんなにお吐きになりましたんですわ。』と、いふ。

相川は立つたまゝもう一度吐いたものを覗いてみて、
『併し、酒を呑んだばかりにしちや變なものを吐いてゐるぢやないか。うへのは血らしいが、……』と、獨語のやうに云つて、
『おい、お浪、こりや醫者を呼ばなけりや、素人ぢやどうにも法がつかねえよ。早く清水先生の處へ電話をかけなつてば。』と、氣を焦つていふ。
お浪は慄へ聲で、
『いゝえ、あの、もう先刻から三度もお電話をかけましたんですけれど、お話中で何うしてもかかりませんから、あの、今しがた婆やさんに行つて貰ひましたんですわ。ですからもう間もなく先生が被來つて下さるだらうと思ふんですけれど……。』
相川はそれを聞くと少しは安心したやうな顔で、默つてお園の樣子ばかりみてゐた。かうなつてみると、素人ではまるで手のつけようがないので、彼もたゞ手を束ねて立つてみてゐるより他はなかつた。
お歌も魂をぬかれたやうな顔をしながら、凝然としてまるで石像のやうに相川の後へ突つ立つてゐた。

お園は又新たな發作が來たとみえ、もう四邊に誰れがゐるのも意識しないやうに、胸を絞つてはたう〳〵と紅い血と粘液を吐きつゞけてゐたが、やがてもう苦悶に耐えられないやうに、矢鱈無上に軀を波打たせながら、
『あゝ、苦しいッ、お浪さん、苦しいッてば！』と、息も絶えだえに呻いて、そのまゝがくりと疊のうへゝ横倒しに倒れてしまつた。その顏は血の氣もない程蒼白になつて、口尻から筋をひいた血の色がぞつとする程物凄かつた。

二十二の九

さうかうしてゐるうちに、婆やと引違へに醫師の清水が僅か鶴島町と南茅場町の間を人引の俥で驅けつけて來て呉れた。清水は年輩の男で、その道にかけては充分經驗も積んでゐる近邊での流行醫者なので、いかにも落着いた調子で相川に挨拶をして、やがてゐぎたなく寢そべつてゐるお園の方を見ながら、
『何うしたのですか？』と、いふ。
相川は一生懸命になつてゐるやうな顏で、

『いや、どうもお忙しいところを御足勞を煩はして相濟みません。何んですか、これが大變に吐いて苦しむもんですから、一寸御診察を願ひ度いと思ひまして。』と、愛想笑ひをしながらいふ。

と、清水醫師はそのまゝお園の枕許へ寄つていつて、吐いたものゝ匂ひでそれと察したが、苦笑ひをして、

『やあ、大分召飲つてゐますな。』と、云ひながら、そつとお園の脈をとつてみて、今度は吐いたものを覗いてみながら、『ふむ、これは可かん。これは胃の血管が破れて吐血をされたのですな。』と、云つて、少時の間じいッと吐物に見入つてゐた。

相川は眉を顰めて、

『それぢややつぱり血なんで御座んすかなあ。どういふ手當を致したら、よろしいでせう。』と、急き込んでいふ。

清水はそれを抑へて、

『いや、まあ一寸お待ちなさい。こりやひよつとかすると、酒ばかりが原因ぢやないかも知れませんから。』と、何處か厳粛な顏で云つて、『あの、濟みませんが、何か匙のやうなものを貸して下さらんですか。』と、いふ。

お浪はすぐさま臺所から匙をもつて來た。

清水はそれで吐物をかきまはしては頻りに匂ひを嗅いでゐたが、やがて無言のまゝ指先で强ばつたやうになつてゐるお園の口を開けてみて、

『おう、こりや喉も非常に糜爛してゐる。相川さん。ひよつとしたら此の方は何か毒物でも飲まれたのぢやないですか、吐かれたものゝ中にも燐分が澤山出て居るのですが、私の考へでは猫いらずでも呑まれたのぢやないかと思ひますよ。』と、顏を上げながらいふ。

相川もそれを聽くと、思はずひと膝乘り出して、

『えッ、猫いらずを？』と、云つたが、みるゝ〳〵顏色を變へて、『さあ、丁度私が留守にしてゐました間にこんな風になりましたんですから、いづれとも分りませんが、併しまさかそんなものは……』と、あやふやな調子で答へる。

清水はそれから眼瞼を引繰返してみたり、聽診器を取出して死んだやうになつてゐるお園の胸を披けて心音を聞いてみたりしてゐたが、やがて力のない顏で、

『いや、こりやたしかに燐の中毒です。何はともあれ、かうして居つては手遲れになりますから、早速手當てをしませう。』と、云つて、彼は大きな革のサックを取寄せて洋服の袖をうへゝぐいッ

と捲りあげながら、大急ぎで手當てにかゝつた。
お園は時々長い呻めき聲を發しながら、手足をがた〳〵打慄はせてゐた。

二十二の十

手當をするといつても、もう吐劑をかけた時に、何の效果もなささうなので、清水醫師は先づ強心劑の注射を一筒試みたあとで、一時經過をみてみることにした。彼は早速サックの中から注射器を取出して、熟練しきつた手つきで、お園の二の腕へ鋭い匂ひのする藥液を五瓦ばかり注射したが、相川はもうその一擧一動から眼を放さずに、

『ねえ、先生、こんな鹽梅で生命には別條御座いませんでせうか。』と、さも心配さうに訊く。

と、清水は小首を傾けて、

『さあ、どうも大分時間が經過して居るので、どうかと思ひますが、併し飲まれた毒物も可成吐き出してゐられるので、ひよつとかしたら、うまく助かるかも知れんですよ。まあ、もう少し樣子を見てみませう。』と、氣休めのやうに云つて、そのまゝ彼は如何にも熱心な眼つきで、じいッとお園の顏をみてゐた。

お園はこくり〳〵と喉を鳴して、やがて瞑つてゐた眼をうすく睜いた。清水はそれをみると、又脈をとつて、今度は兩方の瞼をめくつて瞳孔の反射を調べてみた。

と、その時、お園は急に必死の力を揮つてゐるやうに清水の手をぐいッと拂ひ退けて、

『おい、お歌さん、お歌さん。覺えといでよ。盜賊ッ、盜賊ッ……』と、嗄れ果てた聲で叫ぶ。

お歌はもう唇の色もなくなつて、おど〳〵慄へてゐた。

清水はお園の肩へ手を置いて、

『靜かに、靜かに。』と、云ひながら、彼女が身悶えするのを制してゐたが、お園はやつと意識が歸つて來たとみえ、今度は兩眼をくわッと睜いて、宙に引釣つた眼で相川とお歌の方をじろりとみた。その眼底には二人の姿が朧げながらも映つたのか、彼女は急に片肱で少し上半身を起して、

『相川さん、相川さん。私やもう死ぬんです。お歌さんも、二人とも覺えておゐでよ。私や、あ、あんな方を恨んで、恨んで、……あゝ、死にきれない。あゝ、苦しいッ。』と、彼女は又ものたうちまはりながら呻くやうに云つた。

清水醫師はその肩をそつと抱くやうにして、

『あなた。そんなに體を揉んぢや可かんです。もう少しの間靜かにしてゐないと……』と、云ひ

かけるのを、お園は振り拂ふやうに、
『あゝッ苦しい。もう誰も私を、私を構つちや厭だつてば、私、口惜しい。お歌さん、お前さんは、お前さんは泥坊だッ、人殺しだッ。』と、埒もないことを口走る。その浮釣つた眸をみてゐると、もうお園の魂だけが働いてゐて、體は木偶のやうにこく〳〵と唯無意味に動いてゐるとしか思はれなかつた。
相川は默つてゐられなくなつて、
『おい、お園、お前何を云つてゐるんだ。こんな飛んでもねえことをして呉れて、お前は仕様がねえぢやねえか。おい、しつかりしろッたら。』と、枕許へいつて、力をつけるやうにいふ。
お園は今度はじいッと瞳を据ゑてその顏をみたが、その時、彼女の口尻からは恐ろしい呻き聲と一緒に又たら〳〵と鮮血が筋をひいて流れ出て來た。
相川もお歌も脅えて、思はず顏を背けてしまつた。

二十二の十一

清水醫師はひどく心配して、何うかしてお園を宥めて横に寢せようとしたが、お園はたうとう

血を吐きながら、猶も胸を絞つて、相川とお歌に火のやうな呪ひを投げつける。
『相川さん、あんたは、あんたは私を見殺しにする氣か。あゝ、私や死に切れない。恨めしい。私や、七生までも祟るから、そのつもりでゐて下さい。あゝ、苦しいッ苦しいッ。』さう呻きながら彼女は兩手で胸のあたりを掻拐るやうにしたが、やがて何うしたのか、又ひとしきり激しくけろ〳〵と喉を鳴らして、今度は蠱のうへゝした〻か紅のやうな鮮血を吐いて、そのまゝばつたりその血の中へ前蹌りに突俯してしまつた。
清水醫師は手がつけられないので、茫然として、その樣をみてゐたが、お園が靜かになると、又そつとその手首をとつて脈をみた。そして少時の間、微弱になつた脈搏でも數へるやうに、眼を細くしてゐたが、やがてその手首を靜かに離して、相川の方をみながら、
『いや、相川さん。もう駄目です。折角でしたが、もう手遲れになつてしまつたのです。』と、いふ。
相川は顏色を變へて、
『それぢや先生、もう逝つちまひましたんでせうか？』と、云つて、お歌の方を顧みながら、『お歌さん。とんだことになつてしまつたねえ。』と、唯ひと言いふ。

お歌は顔色も鉛のやうになつてぶる〳〵慄へてゐたが、さうと聞くと、そのまゝそこへがくりと膝を落として、自分でも無意識にお園の死骸の方を向いて合掌する。その手も木の葉のやうに慄へてゐた。

清水醫師は途方に暮れてゐる相川の方をみて、

『併し相川さん。どういふ御事情があるのか知りませんが、毒物を呑んで死なれたゞけに、後の始末が煩いですよ。私の方でも一應警察へさう云つてやらんけりやならんですが、一體どうしたものでせう。有のまゝに報告すれば、無論その筋の檢視を受けんけりやならんですが……』と、氣遣ひさうにいふ。

相川はひとつ處にじいッと眼を据ゑて、せめて亂れた心を押鎭めようとしながら、

『いや、併しもうかうなつてしまつては、何うする譯にもいきませんから、どうか型どほりの手續をとつて頂くより他はありますまい。事情をお話しすれば、私も赤面しなけりやならんことばかりですから、もう何も申し上げませんが、どうも私の家でこんなことをされたゞけに、私も全くのところ弱つてしまふのですよ。』

『いや、そりやお察しします。併し世間にはかういふことはよくあるんですから、まあ、そんな

にお力落としをなさらんでもいゝでせう。診斷書やその他のことは私の方で適宜に取計らつてあげますから、まあ、兎に角大急ぎで、此方の後始末の方からお手配りをなさる必要がありますなあ。』と、親切に云つて臭れる。

相川はそれでもまるで考へがつかなくて、唯ぼんやり考へ込んでゐるばかりであつた。

清水醫師は間もなく、お園の死骸の處置を濟まして歸つていつてしまつた。

二十二の十二

清水醫師が歸つていつてしまふと、お歌はもう他にみてゐる人もないので、まるで氣でも狂つたやうに、いきなり相川の胸へ縋り寄つて、

『ねえ、貴方、何うしませう。ほんとに飛んだことになつてしまひましたわねえ。いくらお園さんだつて、こんなことをするのはあんまりですわ、餘りですわ。』と、嗚咽を呑みながらいふ。

相川はその肩へ手をかけて、

『いや、お歌さん。もうかうなつちや、何から何までバレだよ。何うするつたつて、何うにも仕樣はありやしねえやな。』と、さも絶望したやうに深い嘆息をついて、『それにしても、お園も隨分

思ひ切つた直似をしやがるぢやねえか。何んぼ何んだつて、私の家へ來て、自殺をするなんざ、餘りだねえ。何うしたつて氣狂のすることだ。』と、態と强がつて云つたが、併し彼の顏には何んとも云ひやうのない不安が歷々と現はれてゐるのであつた。

お歌はお園の死顏をみるのが恐さに、もう相川の胸へ顏を埋めて、

『ねえ、貴方、私や今お園さんの云つたことが、そつくり耳の底に殘つてゐて、恐くつて仕樣がありませんわ。あんなことを云つていつたんですから、ほんとに七生までも祟りをするかも知れませんわねえ。あゝ、私、何うしよう。あゝ、私、考へてもぞッとしますわ……』と、泣き聲で云つて、體ごとぶる〳〵慄はしてゐる。よくみると、彼女は手から襟筋へかけて、可哀さうな程鳥肌だつてゐるのであつた。

相川も宥めようがないので、自分も背中から冷水を打懸けられてゐるやうな心持ちで唯おどおどしてゐるばかりであつた。かうなつてみると、彼にも女の一念ほど恐ろしいものはない。自分達を恨み呪つて、斷末魔までもあの物凄い恨みの言葉を殘していつたのであるから、或ひは魂魄この世に止まつて、この後二人の身のうへに何んな禍を下すか知れないのである。昔の芝居によくあるやうなあの恐ろしい妄念を、誰れか空事と斷言し得よう。雨の夜更けに、蒼白い怪火のち

ろめく中から朦朧と在りし世の姿を幻に現ずる亡靈、影のやうな鬼氣を吐く恨みの呻聲、それを思ふと相川は明るい電燈がつひ鼻の先に煌々と輝いてゐるのに、もう息も出來ないやうな恐怖に襲はれて、いきなりお歌の手を執つて立ち上りながら、

『お歌さん、二階へいかう、二階へいかう。』と、云つて、そのまゝ二階へ遁げ上つてしまふとする。

お歌も彼の手に縋つて立つには立つたが、もう腰がぬけてゐて、彼女は一歩を運ぶことも出來ないのであつた。

『お歌さん。何うしたんだな。しつかりしなけりや駄目だぜ。』と、相川は勵ますやうに云つたがお歌は漸々と氣が變になつていくとみえ、あらぬことを口走つては、眼を宙に引釣らしてゐる。

豪所の方でも皆が始末に困つてゐるとみえ、何の物音さへ立てない。家中は不思議にひつそりして、死んだお園の魂が忍び足にそこいらをさまよひ歩いてゐる樣な悽愴な氣が四邊に漲り渡つて來た。

二十三の一

お園の亡骸はもうさうなると、氣味が惡くて、一刻の間も家には置いておけないので、相川は檢視がすむと、すぐに何うにか形をつけてしまはふと思つた。併しお園は今では身すがらで稼業をしてゐて、親許といふものもなし、たつた一人の親爺が臺灣にゐるといふ話は聞いてゐたが、とても今の間には合はないので、相川もひどく當惑した末、兎に角お園が厄介になつてゐる竹水戸家の姐さんといふのに相談してみた。と、その姐さんは吃驚するよりも、もう途方に暮れて、今お園に死なれては借金もそのまゝになつてしまふし、何うにも出來ないと云つて、自分の方がおろ〳〵するばかりで一向話に乘つて吳れなかつた。で、相川もほと〳〵困つて、いろ〳〵話し合ひをつけた揚句、お園の借金の半分は自分が持つからといふのを條件に漸うのことで、お園を竹水戸家へ引取つて貰ふことにしたのであつた。そしてその翌日、竹水戸家から燒場へ送つて、遺骨は親が引取りに來る迄、そこの菩提寺である淺草の圓宗寺といふのへ一時預けることにしたのであつた。

その騷ぎはそれでもやつと三四日で濟んだが、併し濟まないのは相川とお歌の胸の中だつた。

相川は漸次と日が經つにつれ、お園のことがさま〳〵に思ひ出されて、口では緣喜ッ糞の惡いなぞと强い事を云つてゐながら、夜なぞはひどく寢覺めが惡いことがあつた。

お歌も日に日に精神が變調を呈して來て、彼女はもう夜になると、妙な幻影ばかりみておちおち眠りもしなかつた。やれ、今便所へいつたら、お園さんが蒼い顏をして手水鉢の向ふのところへ立つてゐたの、やれ、聲が聞えたのと云つては、おど〳〵して脅えてばかりゐた。

相川もそれを心配して、そんな時にはじいッと自分の胸の中へ彼女を抱き緊めて、

『おい、お歌さん、しつかりしなくちや可けねえぜ。今時、そんな馬鹿なことがあつて耐るもんか。もしかそんな噂が世間へぱつとでもしようものなら、もう取返しがつかねえぢやねえか。こんな緣喜を祝ふ商賣だ。それでなくても妙にケチがついて、此頃ぢや場でも思ふやうに嵩ものが張れないんだから、こんなことをしてゐりや今に私の店は何うなるか分りやしねえ。なあ、お歌さん、だからどうか氣を落着けて、滅多なことを口走らねえやうにしてお吳れ。後生だから。』と嚙んでく〳〵めるやうに一心になつて宥める。

それでもお歌は眼を宙にさまよはせて、

『だつて貴方、私、ほんとにはつきりお園さんの姿がみえたんですもの。』と、云つて、脅えたや

うに泣き出しながら、『あゝ、私が惡かつたんですわ。もう、ちつと前に一度お園さんに逢つて、よく話命ひをつけて置きさへすりや、こんなことにはならなかつたんです。あゝ、私、何うしよう。私、何うしよう。』と、云つては又狂ひ出す。

相川は、彼女の肩を力一杯に抱きすくめて、

『おい、お歌さん、お歌さん。靜かにおしッたら。何うしてさうだ。お歌さん……』さう云つて、取鎭めようとしてゐながら、彼もお歌の狂ほしい眼光をみてゐると、ぞうッと鳥肌だつやうに體中が冷たくなつて來るのであつた。

二十三の二

相川もそれからは日一日に、お歌の樣子が變になつていくので、いろ〳〵と心配をしぬいた揚句、何はともあれ、取急いで彼女と婚禮をして、正式に家へ入れてしまふのが一番よくはないかと思つた。さうすれば、彼女も落着くであらうし、又さうしてゐるうちにはお園のこともいつかしら忘れてしまひ。するであらうと思つて、或日のことそれをお歌に云ひ出すと、お歌は何うしたのか泣きさうな顏になつて、

『ねえ、貴方、その思召はほんとに有難いんですけれど、どうかそれはもう少し先のことになすつて下さいましな。まだお園さんの百ケ日も濟まないうちに、そんなことになつたら、それこそ祟りが恐ろしう御座んすわ。私、そんなことをしたら、きつと取り殺されてしまひますわ。』と、眞顏になつていふ。

相川は笑つて、

『又そんな馬鹿なことをいふ。いつまで貴女はそんな愚にもつかないことを云つてゐるんだね。いゝ加減にしないか。』と、云つて、先々とその話をすゝめようとしたが、お歌は終ひには兩手で耳を塞いで、

『貴方、どうかもう後生ですから、その話はおよしなすつて下さいな。そんなことを仰有ると、又晩にお園さんが私の夢枕に立つて、私を責めぬくに極つてゐるんですもの。あゝ私や思ひ出してもぞッとしますわ。』と、云つて、窶れた頰に耐へ難いやうな苦惱を現はしてくる。

相川はほと〳〵閉口して、

『いや、どうもほんとにそれぢや困つてしまふねえ。何んとかしなけりや今にあんたほんとに氣が狂つてしまふぜ。』と、云つて、考へ込みながら、やがて何かいゝことでも思ひついたやうに、

『ねえ、お歌さん、それぢやどうだい。いつそ祝言をする前に、厄落としに豐川様へでもお參詣に行つて來ようぢやないか。さうしてあのお園の菩提を弔つてやれば、あんたも氣が晴れるだらうし、お園も行くところへ行けるだらうと思ふんだ。どうだい、それがよかないか。』と、やさしくいふ。

お歌は泣き出して、

『貴方、私さうして下されば、ほんとに何よりで御座んすわ。もうかうなつてみると、私神佛に縋るより他はないんで御座いますもの。』と、いふ。

相川ももう此間からそれを考へてゐるのですぐさまさうすることに極めて、早速支度に取かゝつた。豐川様から京都の御本山へ廻つても四日もあれば歸つて來られるので、彼はそゝくさして、もうその晩の七時の急行で東京を立つことに極めてしまつたのであつた。

お歌の歡びは端でみてゐてもいぢらしい程であつた。御本山へもお參りが出來れば、こんな嬉しいことはないといつて、飛び立つやうな顏をしてゐた。

二人はそれから夕方まで懸つて旅の支度をしたが、その混雜の中へ、ひよつくら京枝がたつた一人で訪ねて來た。彼女は何か差迫つた用があるとみえて、何處か落着かないやうにそは〳〵し

てゐた。

二十三の三

京枝は此間來たときとはまるで違つて、家へ上つて來るとすぐからもうお世辭たら〳〵で、言葉つきまでが氣味の惡い程丁寧であつた。相川もお歌も汽車の時間が迫つてゐるので、いゝころ加減に扱つてゐたが、京枝はそれと知つても知らん顏で火鉢の前へ坐り込みながら、新聞でみたといつて、お園のことやら、その後始末のことなぞを先から先と話していつた。そして少時してから機をみて、愛想突ひをしながら、

『ねえ、お歌さん、實は私が今夜お邪魔をしたのは、外のことでもないんですが、あの、例の今戸さんの一件ですがね……』と、切り出す。

相川はそれを横合から引取つて性急に、

『いや、京枝さん、そのことなら私達が旅から歸つて來てからの話に願ひませうか。何分にも急な用事があつて今出懸けようとしてゐる處なんですから。』と、いふ。

京枝は今度は相川の方を向いて、

『いゝえねえ。旦那、それが今迄のお話とはがらりと變つて、今戸さんも實は今度こそすつかり投げ出しちやつて、あの、今夜のうちに何とかうまく納まりをつけてしまひ度いつて仰有つてるんで御座んすよ。それであの、大變に御迷惑でせうけれど、唯今今戸さんは向島の入金へいつて待つて被居いますんで、そちらへ貴方がたお二人にもお運びを願つて、まあ有様の話が打割つたお話をして、もう文句なしにその座で手を打つてしまはふとかう仰有るんで御坐んすよ。ですからどうか貴方もそのお含みで、どうか御面倒でも一寸お顔をお出しになつて下さる譯にやいきますまいか。もう何もこのうへごたゞ〳〵することはないんで御座んすし、今戸さんも今夜はさらりと一杯飲んで、器用に今迄のことは水に流してしまふはと仰有つてるるんで御座んすもの。』といふ。

相川はぬからぬ顔をして、じろりと京枝の方をみながら、

『いや、そりやまことに結構なお話しで、此方も是非さういふことにお願ひし度いんですが、併し何にしろ今立たうといふ處なんですからなあ。』

『いゝえ、そりや御迷惑なことはよく分つてるますんですけれど、でもまあ今戸さんもあゝ折れて出て被居るんですから、そこは此方でも察して頂いて、何んとかなすつて頂く譯には參りませんでせうか。何あに手を打つだけなんですもの、さうお手間は取らせもしませんし、ほんの一時間かそこいら顔を出して頂けばそれでいゝんで御座んすもの。ですから、如何です、此次の汽車にお延ばしになつて、此方の話だけでも片をつけて被往つたら私、却つてお氣懸りがなくていゝと思ふんで御座んすがねえ。』

相川はそれでも決し兼ねて、お歌と顔を見合はせながら、返事に困つてゐた。

京枝は熱心な顔になつて、

『ねえ、お歌さん、あんたも今迄隨分私を手古摺らせたんだから、今度は私のいふことを聞いて呉れてもいゝでせう。それにこんないゝ折はないんだからねえ。』と、いひながら半分は賴むやうにお歌の顔をみた。

二十三の四

相川も京枝の樣子で、もうとても唯では歸りさうもないのを察して、やがて面倒臭さうにつんつんしながら、

『それぢや京枝さん、兎に角その場席に私達が二人で顔さへ出しやそれでいゝんですね。』と、駄

目を押すやうに云つて、もう一度お歌の方を向きながら、『ねえ、お歌さん、それぢや京枝さんが折角あゝ云つて下さるんだから九時の汽車に延ばすことにして、一寸顔だけ出さうぢやないか。實際のところ、今戸さんがさう折れて出て來て呉れりや、話や右から左へ埒があいちまふんだもの、さうすりや此方もこんな都合のいゝことはないんだからねえ。』

お歌も自分では今更今戸さんに逢ふのは厭で耐らなかつたが、相川がさういふ氣になつてしまつては、自分ばかり突ツ張る譯にもいかなくなつて、滋々承知した。そして二人は奥の間へ立つていつて、何かごと〳〵話合つてゐたが、やがて相川は金庫を開けて、頻りに紙包みのやうなものをこしらへて、それを革の大財布へ挾むと、そのまゝ此方へ出て來て、お浪を呼んで自動車を一臺さう云はせる。

京枝はそれを手で押へて、

『あら、あの、自動車なら、私、今戸さんに頂いて今そこまで乘つて來ましたんですよ。あすこの通りの角のところへ待たしてありますから、何うかそれへお乘りなすつて。』と、いふ。

相川は笑つて、

『はゝゝゝゝ。いや、どうも何から何迄、薄ツ氣味の惡い程お手が屆いてゐるんですなあ。それぢや時間が急ぎますから、すぐにお伴しやうぢやありませんか。』と、云つて、店の半造を呼んで、旅へもつていく荷物は午後の八時半までに東京驛へ持つていつて、一二等の待合室で待つてゐるやうに命じて、そのまゝ玄關の方へ出ていつた。

京枝もお歌も前後しながら、その後から隨いて、戸外へ出ていつた。

大通りの角のところには、箱型の自動車が待つてゐた。京枝は先づ相川とお歌をそれへ載せて、自分は端の方へ小さくなつて乘つた。相川は自動車が走り出すと、京枝の方を向いて、

『ねえ、京枝さん。それにしても今戸さんは馬鹿に急に捌けた人になつてしまつたもんですなあ。一體何うしてさういふ氣になつたんです。』と、訊く。

と、京枝はにこ〳〵して、

『いゝえ、それツてのもつまりお園さんのことや何かで、あの方もお考へなすつたんですよ。いつまでこんなことをしてゐたつて、他人樣に迷惑がかゝるばかりですし、それにようく考へてみりや全く大人氣のない話ですもの、さう云つちや何んですが、たつたお歌さん一人の爲めに、世間で何んとか云はれる方達が二人して警察を仲へ入れて、野暮なごた〳〵を起すなんて、端からみても馬鹿々々し過ぎますしねえ。それにもうお歌さんも貴方のお内儀さんに据ると極つちや、

今戸さんだつて今が丁度手の退き時ですよ。ほゝゝゝゝ。』京枝はいつになく上機嫌で、噪いだ笑ひ聲をたてるのであつた。

自動車はそれから濱町へ出て、向兩國から吾妻橋の方へ向つて、一散に走つていつた。

二十三の五

自動車が向島の土手へかゝると、車窓からはほの白い河面が、ひろ〳〵とみえて、向ふ河岸の灯影が秋らしい明麗な影を流してゐるのが、いかにも美しくちろめいてゐた。

相川はもうすつかり落着いた心持ちになつてゐるとみえ、お歌の方を向いて、

『ねえ、お歌さん。隅田川といふやつあ、いつみても氣持のいゝ川だねえ。どうだい、待乳山がほんのり霞んで、淺草や吉原の燈があんなに空へ映つてゐるぢやないか。昔この土手を自動車で飛ばす時にや、きつと粹事があつたんだが、今夜はこれから情事でつめ開きのお白洲へ上るのかと思ふと、浮世は變れば、變るもんだねえ。はゝゝゝゝ。』と、笑ふ。

お歌も車窓から川の方を眺めながら、默つて微笑んでゐた。

京枝は頻りにそは〳〵して、彼方此方をきよろ〳〵見廻してゐたが、自動車は言問のところで

大曲りに曲つて、猶も眞慕に駛つていく。

相川はやがてふいに口を切つて、

『ねえ、京枝さん。行く先はたしか入金だとかいひましたね。それにしちや、この自動車は變な方へいくぢやありませんか。入金なら先刻の横丁を右へ入りやいゝんだが、……』

京枝は白ばツくれたやうな顏をして、

『まあ、さうで御座んすか。私、お恥かしい話ですが入金なんて家は名前ばかり聞いてゐて、行つたことがないんですよ。』と、云つて、

『あの、行先は自動車の運轉手さんが知つてゐますから、大丈夫で御座んすよ。兎に角、今戸さんがこの自動車で相川の旦那とお歌さんをお誘ひして來ればいゝからと仰有つたんですから、……』と、いふ。

相川は頻りに車窓から四邊の樣子を見ながら、

『いや、こりや可けない。こりやもう入金よりずつと先だ。もう直き白髭ですぜ。』と、云つたがその時、自動車はどうしたのか、土手の左角を曲つて、急な細い道へ足搜りをするやうに入つていく。

相川は笑つて、

『いや、京枝さん。あんたもそゝッかしいねえ。入金てのは間違ひで、水神ぢやねえんですかい。こりや水神へ入る道だ。』と、いふ。

京枝は平氣な顏で、

『あ、さうかも知れませんよ。何んでも私も慌てゝゐたもんですから、聞き違ひをしたのかも知れませんよ。』

さうしてゐるうちに自動車は田圃道のやうなところへ出て、間もなくこんもりした樹立のある一軒の家の門の前へ來てぴたりと停つた。それをよくみると、待合風の門構へで、植込みの彼方には燈のあか〳〵と點つた二階座敷が葉蔭を透いてみえてゐる。

相川もお歌も怪訝さうな顏で、じろ〳〵みてゐたが、京枝は委細構はずに、運轉手が扉を開けると、

『さあ、旦那、お歌さん。下りやうぢやありませんか。』と、云つて、自分が先へついと下りた。

二十三の六

相川もお歌も、やがて仕方がなしに、自動車を下りるには下りたが、併しそこの家は水神の八百松でもなければ、無論入金でもなかつた。打見たところでは、可成り廣さうな家構へで、裏はすぐ隅田川に臨んでゐるらしく、樹立を透いてみえる二階座敷の樣子なぞは待合のやうでもあるし、又仕舞た家のやうでもあつた。此處邊の地理には相當に明るい相川にも、何處いらの何う云ふ家だか、一寸見當がつかないのであつた。

京枝は此處まで來たからにはもう遁がさないといふやうに、相川とお歌の後へ廻つて、

『さあ、どうかずつとお入んなすつて下さいましよ。今戸さんもさぞお待ち兼ねだらうと思ひますから。』と、云つて、迫き立てる。

相川も此期に及んで躊躇してゐるのも男らしくないと思つて、お歌を促しながら、

『さあ、それぢや一寸一時間ばかしお邪魔をしようぢやありませんか。』と、云つて、大股に肩を張りながらつか〳〵門の中へ入つてゆく。

玄關はそこから十歩ばかり入つた右手の處に横向についてゐた。細目格子の中には粹な鐵燈籠がほんのり點つてゐて、杏脫にも打水がてら〳〵光つてゐた。

皆の足音を聞きつけて、中からは五十格好の、險のある顏つきをした女が出て來て、につこり

しながら、

『おや、被來いまし。お師匠さん、もう先程から、そりや旦那がお待ち兼ねでねえ。さ、どうかずつとお上んなすつて。』と、京枝にいふ。

三人はそのまゝつながつてうへへ上つたが、家の中は外見よりも猶ほ粋に出來てゐる。どうみても待合といふ建て方であつた。

取次ぎに出てきた女は、廊下の突當りについてゐた階段へ皆を案内していつて、

『ねえ、お師匠さん、旦那はお二階の十疊に被居いますから、どうか……』と、いふ。

京枝は心得て、相川とお歌を先へ上げたが、二階ではその時、今戸さんの大きな笑ひ聲が聞えて、酒の香が何處からともなくぷんと匂つて來た。

京枝はそこの紙襖のところへいつて、外から聲をかけると、中からは今戸さんの聲が、

『やあ、京枝さん、早いねえ。さ、まあどうか此方へ。』と、いふ。

その聲と同時に、京枝は紙襖をがらりと引開けたが、とみると、そこの十疊には大きな紫檀の卓が眞中のところに据ゑてあつて、その周圍にはきちんと座布團が敷き廻してある。その卓のうへには一寸した摘みものが並べてあつて、今戸さんともう一人は思ひがけない島田が並んで坐つ

て、もう酒を初めてゐるところであつた。

今戸さんは相川とお歌が入つてくるのをみると、態とらしく愛想笑ひをして、

『やあ、こりやお揃ひで、ようこそ。さ、まあ、どうか此方へお入んなすつて下せえ。』と、下へも置かぬやうに云つて、『いや、どうもお忙しいところを態々お運びで、恐縮です。併しよくまあ被來つて下さいました。』と、云つて、自分で布團をすゝめる。

相川もお歌も意想外な今戸さんの態度に氣を呑まれて、もぢ〳〵してゐた。

二十三の七

座が定まると、今戸さんは大きな顔に絶えずにこやかな笑ひを浮べながら、相川の方をみて、

『やあ、どうもほんとにお忙しいところをお呼び立てして、相濟みませんでした。實は私の方から出向くのがほんとうなんでんが、つひどうも、無精をやつちまひまして。は〻〻〻。』と、大きく笑ふ。

相川は何だか薄氣味が惡くなつて、手持ち無沙汰さうに煙草を取出しながら、

『いや、どうも態々お使ひで却つて恐れ入りました。私もお名前はよく伺つてゐましたが、お眼

にかゝるなあ今夜が初めてゞ、どうかまあこれからはひとつお心易くお願ひ致します。』と、ゆつたりした態度で初對面の挨拶をする。

今戸さんは盃を洗つて、相川にさしながら、

『いや、どうも御挨拶で、恐縮です。私こそどうかよろしく。』と、云つて、京枝に酌をさせる。

そこへ今取次ぎに出て來た女が平盆へいろんな料理を載せて運んで來た。京枝は、それをまめまめしく卓のうへゝ並べながら、

『ねえ、貴方、今戸の旦那。實は貴方が入金だつて仰有つたもんですから、私、そのつもりでお二人をお誘ひして來たんですが……』と、云ひかけるのを、今戸さんは笑ひながら引取つて、

『いや、どうもその件ぢやすつかり恥をかきさ。實はあれから直ぐに電話で入金へ座敷を取らせたら、今日は生憎大きな宴會があつて、廣いところが塞がつてゐるッてんで、もう何うにも仕方がねえから、此處にしたのさ。』と、云つて、又相川の方を向きながら、『どうも相川さん、ほんとに濟みませんでした。入金だと一寸乙だつたんですが、今お話ししたとほりの譯で、こんな穢くろしいところで失禮ですが、どうか御勘辨なすつて下せえ。實は此處はつひ十日程前に私が手に入れました家でね、はゝゝゝ。どうせ私のこつてすもの、抵當流れか何かで自分のものにしたん

ですが、しかしこれで奥まつてゐて、乙で御座んせう。私も靜かなんで、一寸氣に入りましてな。まあ、ゆく〳〵は連れ込みのきく待合兼料理屋ッてなものにでもして、誰れかに商賣をさせようと思つてゐるんですが、又其節はどうか御贔屓に願ひますよ。』と、いふ。

相川も變な氣はしたが、それでも別に氣にもしずに、

『いや、大變に結構なお住居で。』なぞと云つて、笑つてゐた。

京枝はいつものお饒舌で、相川達が旅へ出ようとしてゐることをべら〳〵饒舌り出したが、今戸さんは氣の毒さうな顏で、

『ほう、それぢや今夜お立ちなんですか？　そりや、そりや飛んだ御迷惑をかけてしまひましたなあ、何方の方面へお出懸けですか。』と、訊く。

相川は今戸さんから貰つた盃を返しながら、

『いや、別に何んですが、一寸上方まで行つて來ようかと思ひましてねえ。』と、いふ。

島田はそれまで何とも口をきかなかつたが、それでも彼は機を窺つてゐるやうな顏で、じろりじろり相川とお歌の顏をみてゐた。

二十三の八

今戸さんはそれを聞くと、又愛想笑ひをして、

『へえ、上方へ？　そりや結構ですなあ。もうそろ〳〵時候が秋めいて來ましたから、京都、奈良あたりやさぞよう御座んせう。何か御商用でもあつて、それ旁の御遊山ですか。』と、いふ。

相川は態とお歌の身分を立てやうとして、

『いや、ほんとうのことを申しますと、別にこれといふ用もないんで御座んすが、實はこの人がどうも氣分が優れませんで、それにお參詣りもし度いなんていふもんですから……』と、煙草を吸ひながらいふ。

と、今戸さんは大仰な表情をして、

『いや、そりや、そりや何うも何よりなことで。』と、云つて、初めてお歌の方を見ながら、

『いや、お歌さん、あんたにも隨分久濶だが、どうも又いろ〳〵野暮なことでこだはつて、大變に迷惑を懸けちまつたよ。何うかまあ、今夜はひとつさらりと水に流して貰ひ度えと思つて、此處まで來て貰つたんだが、併しそれにしても、體が惡いなあ可けねえね。さう云やあ顏色も先時

分からみると、あんまりよくねえね。折角こんな仕合はせが向いて來てゐるのに、今になつて煩ひつきでもしちやそれこそ資本も、子もなくなしてしまふぜ。はゝゝゝ。一體何うしたんだね？』と、いふ。

お歌は何だか返事をしそびれて、唯俯向いてゐた。

相川はその横顏をみて、

『いや、別に何處が惡いつてんでもないんで御座んすが、やつぱりその、一種の氣病みでしてなあ。旅へでも出たら、さつぱりするだらうと思ふんですが、……』

今戸さんもお歌の顏をしげ〳〵みて、

『へえ、氣病みでねえ。いや、先達から何の彼のとごた〳〵してゐたんでお歌さんも到頭根負がしたんだねえ。いくら丈夫な人だつて、これほど揉めりや大概參るからねえ。はゝゝゝゝ。』と、云つて、ふつと思ひ出したやうに、『いや、さう云へば相川さん、先日は又ほんとに飛んだことでしたなあ。私やその、新聞が嫌ひなんで、ちつとも知りませんでしたが、この京枝さんから聞きましてねえ、吃驚したんですよ。どうもあのお園つて女も隨分思ひ切つたことをするぢやありませんか。いくら流行だからつて、猫いらずで往生するなんざ、あんまり手前の體を粗末にしすぎ

てるぢやありませんか。どうせ死ぬんなら、もつと色つぽく大川へどんぶりとでもやらかしやいゝのに、鼠の道伴れぢやぞッとしねえぢやありませんか。はゝゝゝゝ。私も昔はあの女を一寸張つたこともあるんで、妙に人情に絡んでしかたがねえんですが、併しあゝいふ性分の女は滅多にそんな眼先のみえねえ眞似はしねえもんだが、併しやつぱり何か退引きのならねえ經緯があつたんでせうなあ。かうなると、相川さんも大した色男でさあ。兎に角女を一人殺しちやつたんだからねえ。お歌さんの氣病みッてのも大方そこいらから來てゐるんだらうが、相川さん、あなたもさう罪を重ねちや末はどうせいゝことはありませんぜ。はゝゝゝゝ。』と、大きく笑ふ。

相川は苦笑ひをしてゐた。

二十三の九

今戸さんは猶ほも言葉を續けて、

『いや、相川さん、そいつあまあ笑談だが、實はね、あなた。その、私もお園のことやら、それから又他にもいろ〳〵聞き込んだこともありますんで、實は私も茲でひとつ了見を入換へて、もう例の件は一切今夜限り水に流してしまはふと、かういふ考へになりましたんですよ。それで、それにや又いろ〳〵小面倒な道もあるだらうたあ思ひましたが、併し、お互にこれでも世間で相當に顔も賣つてゐる人間だし、殊に男と男の間のこつた。いつそ、さつぱりと顔を合はせて、器用に一杯やつてお別れといふことにした方が、私や粋だと思ひましたんで、今夜まあ、態々こんな處まで御足勞を願つた譯なんですが、ねえ、相川さん、あんたのお考へは如何なものでせう。』と捌けた口調でいふ。

相川もさう云はれると、嬉しさうに笑つて、

『いや、お言葉で、どうも恐れ入ります。貴方の方がさう穩かに出て下さりや、私の方ぢや願つてもねえ仕合はせですから、どうかまあ、そこの處はよろしくお願ひ致し度いんで御坐んすよ。』と、云つて、彼は懷を搔き探りながら、『それで私も一應の順序としまして、このお歌さんにも形ばかりのお詫をさせて、その時に頂いた四百圓のお金もお返しゝて、まあ、そのうへで綺麗に手を打つて頂き度いとかう思つてるんですが、……』と、云つて、先刻の紙包を取出して、そつと今戸さんの方へ差出しながら、『實はこの中に金が入つてゐますから、甚だ露骨で失禮ですが、どうかお納めを願ひ度う御坐んす。』と、穩かにいふ。

今戸さんもにつこりして、

『いや、こりやどうも恐れ入りますなあ。こんなものはまあ、何うでもいゝんですが、併し、これを頂かないと、又貴方が氣でも悪くなさると可けませんから、それぢやまあこのまゝそつくりあいとくことにしませう。』と、云つて、紙包を取つて、懐へ無雑作に納めながら、『それで、私やちらりと聞いたんですが、貴方はこのお歌さんといつ頃御祝言をおあげになるおつもりなんですか？』と、さりげない調子で訊く。

相川は少してれたやうな顔で、

『さあ、そいつはまだはつきり極つちやゐませんが、出來ることなら成る可く早く正式に家へ入れ度いと思ひましてなあ。』

『いや、さうですか。そりやまあ何よりなこつた。お歌さんも全くさうなりや、それこそ仕合はせですよ。女の身で、いつまで浮いた稼業をしてゐられるもんぢやなしね。』と、云つて、お歌の方を向きながら、『なあ、お歌さん、ほんとにお前さんもうめえことをしたよ。相川さんのやうな立派なお店のお内儀さんになれりや、お前さんもこのうへのことはねえやな。お師匠さんもその話を聞いて、憎いお歌だが、さうやつて身を固めて呉れりや、いくらか私も氣が晴れるといつてお腹の中ぢや嬉んでゐなさゐ樣子だつたよ。まあ、いゝ、私もお祝がし度えから、さ、一杯清く

受けてくんな。』と、云つて、盃を出す。

お歌も默つてそれを受けた。

二十三の十

それからは今戸さんも相川も、京枝も皆なすつかり打解けたやうな顔になつて、盃の献酬をさかんにやりだした。

相川もこの席で飲んでは可けないとは思ひながらも、好きな酒とてつひ一つ二つと盃を重ねていつた。彼の顔にもいつの間にかほうツと赤みがさして來て、彼は口も輕く、

『いや、これで私も全くの處さぱ〳〵しましたよ。實を申すと、私も今度ばかしは少々弱りましてなあ。お歌さんのいさくさがあるうへに、例のお園の一件が持上つて來ましたんで、全く手も足も出なくなつちまひましてなあ。實際人間てものは、明日のことは分らないと思ひまして、空怖ろしくなりましたよ。はゝゝゝ。』と、笑ふ。

今戸さんもひどく機嫌がよささうな顔で、

『はゝゝゝ。いや、そりやあなた、身から出た錆だから仕方がねえでせう。あなたが自分でお

蒔きになつた種ぢやねえかも知れねえが、併し貴方の體が心になつてゐる以上は、それ位な目に遭はなけりや端にゐるものが胸ツ糞が悪う御坐んさあね。私やほんとにいゝ氣味だと思つてゐるんですよ。はゝゝゝゝ。』と、笑つて、又盃を相川へさしながら、『しかし考へてみりや私達も糸目分氣の利かねえ役廻りだが、まあ生命があるだけ諦めがつきますよ。そこへいくと死んだお園が一番貧乏籤で、このお歌さんが全くのところ仕合はせのひとり占めさ。ほんとうにうまくやつてゐるよ。なあ、京枝さん。』

京枝もお歌の方をみながら、

『ほんとにね。人間てものは何が仕合はせになるか知れませんねえ。お歌さんなんざ、きつと前の世で何かいゝことでもして來たんでせう。それでなけりやあんまり運が強過ぎますよ。ほゝゝほゝ。』

島田はその時、何か口を入れさうにして、ふつと又自分を押へてゐるやうに口を噤みながら、默つて酒ばかりぐい〳〵飲んでゐた。

お歌もなまじ口を出して、變なことになると困るので、居坐ひも崩さず、きちんと坐つて、顏を伏せてゐた。

今戸さんはそれが氣になるとみえて、時々お歌の方を、じろり〳〵と妙な眼つきで眺めながら何うかして彼女に口をきかせようとしてゐる樣子であつたが、やがて又別な盃をさして、

『さあ、お歌さん、お前さんだつて、嫌ひな酒ぢやねえんだから、そんなに溫和しく形づけてゐねえで、ぐいとやつてお呉んなせえ。さ、お酌は私がしてやるから、景氣よく二三杯たてつゞけにやるさ。はゝゝゝゝ。』と、云つて酌をしてやりながら、何の彼のと云つては、到頭彼女に三四杯一度に飲ませてしまつた。

お歌も氣が沈んでゐるので、つひ酒がうまくて、終には自分も盃をひとつ持たせられてしまつた。

座は漸う亂れて、さうかうしてゐるうちに、もう相川達は汽車に乘る時間が刻々に迫つてくるのであつた。

二十四の一

一同はそれからもさかんに盃を流行らせて面白く飲んだ。漸次に醉ひが廻つていくので、氣もゆるんで、賑やかな笑聲は絶えず下坐敷の方までも聞えてゐた。

相川も腹までは許してゐなかつたが、併し表面はもうすつかり甲も鎧もぬいで、今戸さんとしげ〳〵盃の献酬をしながら、お互に打明け話をやつては笑つてゐた。

そのうちにもう八時も過ぎてしまつたので、さすがに彼も氣が急いて來て、機をみては歸り支度をしようとしてゐたが、お歌もそれを見てとつて、彼の方へ眼配ばせをしながら、

『ねえ、貴方、もうそろ〳〵行かうぢやありませんか。』と、そッと耳打ちをする。

と、今戸さんは眼早くその樣をみて、自分も時計を出してみながら、

『お、もう八時過ぎか。』と、云つて、お歌の方をみながら、『お歌さん、まあい〻ぢやねえか。折角話が面白くなつて來たところだ。それに上方へは急な用があつて行くんぢやねえんなら、どうだい、いつそのこと明日に延ばして、今夜はこれから、此處へ遠出で藝者でも招んで、ひとつうんと打騒がうぢやねえか。は〻〻〻〻。』と、いふ。

相川は一寸頭を下げて、

『いや、有難う御坐んす。だが併し、私も店の方の都合がありますんで、まあ、今夜はこれで失禮させて頂きませう。又向ふから歸つて來ましてから、今度は私の方から改めてひと戦やらかしませう。どうかその御覺悟で。は〻〻〻〻。』と、今戸さんは大きく合點いて、

『いや、そんな御都合なら、却つて煩くお引留めをしちや御迷惑でせうから、それぢやまあ、お歸りまで、この盃はお預けしときませう。』と、清く云つて、京枝の方を向きながら、『なあ、京枝さん、それぢやお前さん氣の毒だが、階下へいつて自動車を一臺さう云はせて呉んな。』と、いふ。

京枝はそのま〻立つて、階下へ行かうとしたが、相川はそれを押へて、

『いや、京枝さん、このうへ御馳走になつちやあんまり恐縮ですから、もし電話がありましたら一寸それを拜借して、店から迎ひを寄越させることにしませう。』と、いふ。

今戸さんはまあそんなことを云はずに、もう時間もあんまりないことだから此方のに乘つていつたらい〻だらうと、云つたが、相川はそれを斷つて、兎にも角にも店へさう云つて呉れと頼んだ。

京枝は一切引受けて、

『あの、實は此方にはまだ電話が來てゐませんのですから、階下の小母さんにそこの角の酒屋さんまで行つて貰ひませう。ねえ、相川の旦那、お店のお電話は何番でしたらう。』と、いふ。

相川は宙腰になつて、

『店の電話は溜町の二千九百三十一番から五番までゞすが。』と、いふ。

京枝はこくりと合點いてそのまゝ階下へ下りていつてしまつた。

二十四の二

京枝が行つてしまふと、今戸さんは又改めてもうひとつ盃を相川にさしながら、

『ねえ、相川さん、どうせ何んなら、此方の自動車に乘つて被居つて下さりやいゝぢやありませんか。お店からお迎ひが來るとすると、どうしたつて三十分の餘はかゝりますから、九時の汽車にやとても間に合ひッこはありませんぜ。ほんとに無駄なことぢやありませんか。』と、いふ。

相川はうすく笑つて、

『いや、もし時間に遲れるやうでしたら、その次の汽車にしてもいゝんで御坐んすもの、九時半にもうひとつ神戸行きがありますんですから、……』

『はゝゝゝゝ。どうもあんたも中々これで意地ッ張りの方ですなあ。どうせそれなら明日の朝になさりやいゝぢやありませんか。さうして今夜は折角これだけ顏が集まつたんですから、ひとつ面白く飲んで、それでお別れといふことにしたら、私や一番よからうと思ふんですがねえ。はゝゝゝ』と、まだ未練が殘つてゐるやうにいふ。

相川も笑つて、

『いや、私もさうし度いのは山々なんですが、併しどうしても今夜のうちに東京を立つにや立つて置きませんと、先が迫きますんでねえ。』と、盃をふくみながらいふ。

さうしてゐるうちに、いつまでたつても、京枝が歸つて來ないので、相川もそろ〳〵心配になりだして、

『あの、今戸さん、その、電話をかりる家といふのは、此方から餘程離れて居りますんですか。』と、氣懸りさうに訊く。

と、今戸さんは首を傾げて、

『さあ、私もよくは知らねえんですが、何でも、土手へ出る少し手前のところらしいんですよ。併しそれにしても女の足だつて、十分とはかゝりやしませんから、もうそろ〳〵歸つて來る時分

ですよ。』と、いふ。

それから五分ばかりたつと、京枝はやつと歸つて來た。彼女はもう階段の上り口のところから聲をかけて、

『ねえ、相川の旦那、今實は階下の小母さんに頼んだんですけれど、お燗の支度やら、お料理の支度やらで忙しさうにして被居るから、お氣の毒だと思つて、私、自分でひとツ走りいつて來ましたんですの。』と、息を切りながらいふ。

相川も氣の毒さうな顏で、そつちを向いて、

『やあ、そりやどうも御苦勞樣でした。申譯もありません。』と、云つて、『あのそれで迎はすぐ寄越して呉れますでせうか。』と、いふ。

京枝は此方へは入つて來ずに、『え、お迎ひはすぐに出すと仰有つてゐましたけど、ねえ、旦那、あのそれよりも、お店の方が、あの、何んですか急な御用があつて、是非旦那に、お電話口まで願ひ度いつて仰有つてゐるんで御坐んすが、如何致しましたら、よろしいでせう。何んでも餘程お急ぎの御用らしいんで御坐んすよ。』と、此方をみながらいふ。

相川は困つたやうにそつちを見返した。

二十四の三

相川はやがてもう氣がせか〳〵するやうに宙腰になつて、

『それぢや京枝さん。私これから直ぐに電話口へ出ませう。あんたお氣の毒ですが、もう一度どうか私を連れていつて呉れませんか。一人ぢや樣子が知れませんから。』と、いふ。

京枝は笑ひながら合點いて、

『えゝ、えゝ、そんな御用ならいつでも致しますよ。それぢや旦那、すぐに何卒。』と、云ひ置いて、彼女はひと足先に階段を下りてゆく。

相川も今戸さんに一寸會釋をして、今度はお歌の方をみながら、

『ぢやお歌さん、あんた少しの間此方で待つてゐて下さいな。きつと本所の丸十さんと受渡しの用だらうと思ふから、私が電話口へ出さへすりやそれでいゝんだらうと思ふから。』と、さう云つて、相川はそれなり階段を下りていつた。

階下の玄關にはその時、京枝がもう下駄を穿いて土間へ下りてゐて、

『どうも却へつてお店へ電話をかけたゝめに、籔蛇をやつちまひましたのねえ。ほゝゝゝゝ。お

忙しいお體なんですから、こんな時にや却つて御迷惑ですわねえ。』と、愛想よくいひながら戸外へ出ていく。

相川もそのあとから隨いていつたが、戸外へ出てみると、そこいらには店屋らしいものは一軒もなくて、がらんとした畑地の彼方には大きな工場でもあるらしく、高い煙突が二三本夜の空に蠶乎と聳えたつてゐた。

京枝は四邊を見廻はして、

『ねえ、旦那、ほんとに寂しい處で御坐んせう。今戸の旦那もほんとに物好きな方ぢや御坐んせんか。こんな處へお家をお購めになるなんて、私氣が知れないと思ひますよ。』と、いふ。

相川は笑つて、

『いや、併し寂しいだけに、閑靜でよう御坐んすよ。併しこゝは何處いらに當るんでせうなあ。向島にもこんな處があるのか知ら。』といつて、何處かに眼じるしを捜し出さうとして、近廻りをきよろ〳〵見廻す。

京枝は暗い道を足さぐりしながら先へ立つて、

『いえね、私にも何うもまるで方角が分らないんで御坐んすよ。今も電話をかけるその酒屋さんといふのが分らないで、そこいらを散々捜したんですもの。』

それでももう二丁ほども歩いたと思ふと、すぐ向ふの處にやつと土手らしいものがみえて來た。その裾に續いた人家にはほんのりとした灯影が動いて、何處かで子供の泣く聲が聞えたりした。

相川は足場の惡い畦路のやうな處なので、ともすると泥濘へ足を取られさうになるのを、やつと踏みこたへながら歩いていつたが、やがて石炭殼を敷いた小路へ出て、そこから土手へ上る角のところに、小さな一軒の酒屋がみえて來た。

京枝はそこへ相川を連込んでいつた。

二十四の四

相川は京枝の口添へで、その酒屋の帳場のところへついてゐる電話を借りて、すぐさま店を呼び出してみた。と、電話口へ出て來たのは、安西で、

『やあ、旦那、態々どうも恐れ入りました。實は先刻から方々お出先を調べてみたんで御坐んすが、何處にもおゐでがないんで、ひどく困つてしまひましてなあ。そこへ丁度折好くそちらからいゝつて來たもんで御坐んすから……』と迫き込んでいふ。

相川も氣が氣ではないやうに、

『お、さうだつたか。それで用つてのは何んだね。丸十さんの受渡しの件ぢやないのか？』と、此方から切り出す。

と、安西は言下に、

『いゝえ、旦那、そんなことぢやねえんで御坐んすよ。店の方の用なら、もうちやんと私共がお引受けしてゐるんですから、どうか御安心なすつて。』と、云つて、一寸聲を潜めながら、『ねえ、旦那、實は、唯今し方、此間來ましたあの新場橋の警察の刑事さんが又店へ參りましてねえ、途方もねえことを云ふんで御坐んすよ。詳しい話は聞きませんが、何んでもあの、イボ宮が大變に大きな詐欺を働いたとかいふんで、今日の夕方いよ〳〵上げられましたさうで、就ては先達イボ宮と一緒に店へ來ました、あの島田とかいふ人で御坐んすなあ。あれもその相棒なんださうで、どうも今日も此方へ立廻つてゐる形跡があるから、もし居處が分つてゐるんなら知らして呉れといふんで御坐んすよ。で、私共ではさつぱり當てのつかねえことで御坐んすから、唯今主人が留守ですからといつて、お斷りしたんですが、どうしても御主人の出先を調べろといつて聞かねえもんですから。』と、ひどく途方に暮れてゐるやうにいふ。

相川もそれを聞くと、稍ぎつくりしたが、さあらぬ顏で、

『ふむ、そんなことか。それなら何も心配することはねえやな。主人の出先が分りましたが、主人もちつとも存じませんとさう云つて置きねえ。それでまだその人はそこにゐるのか。』

『いゝえ、もう三十分ばかし前に歸りましたんで御坐んすよ。又一時間ほどたつたらもう一度來るからと云ひ置いていきましたから、もう一度はやつて來るだらうと思ひますが。……』

相川はその時、何かしらもう先刻から島田の樣子が薄ッ氣味が惡くて仕樣がないので、いつそ此方に來てゐることをばらして、刑事の手引きをして、今夜の中に上げさせてしまへば、後の憂ひは除けると思つて、一時はさうしようかと考へたが、すぐ傍で京枝が聞いてゐるので、どうもその仕事がしにくゝて、つひ電話口では云へなくなつてしまつた。で、彼は兎に角刑事の方へは知らない一點張りで返事をして置けと安西に云ひ含めて、何よりも早く停車場の方へ向ひ度いと思つて、自動車の催促をした。

安西は今半造が靈岸橋のガレーヂへ賴みにいつてゐるから、もう直にそつちへ迎ひにいくだらうと云つた。

二十四の五

相川はその電話を切つてしまふと、京枝の方を向いて、

『いや、どうもいろ〳〵御面倒をかけました。お庇護様で用が足りましたよ。は〵〵〵〵。』と、事もなげに笑つて、店口の方へ出てゆく。

京枝は酒屋の奥へ禮を云つて、そのまゝ相川のあとを追つて出て來ながら、

『ねえ、旦那、一體何んの御用だつたんで御坐んすの。何かお店で御面倒なことでも持上つたんで御坐んすか。』と、おせつかいに訊く。

相川は土手の方へ出て、

『いや、何に、別に大した用でもないんですが、やつぱり私がゐないもんですから、店の奴等何んでも彼んでも大業にしてしまひやがるんですよ。は〵〵〵。』と、云つて、帶の間から時計を出して透かしてみながら、『おや、もう八時五十分だ。笑談ぢやない。こんなことをしてゐりや九時半の汽車にも間に合はねえかも知れねえ。こいつあ困つたなあ。』と、いふ。

京枝は態と先刻の畦道へ出ずに、

『ねえ、旦那、今度は向ふの廣い道を廻つて歸らうぢや御坐んせんか。幾らも違やあしませんから、足溜りのいゝ方が却つて早く歸れますよ。』と、いふ。

相川はうか〳〵と京枝の云ふなりになつて、

『いや、それよりもほんとに間に合ふか知らんなあ。これで、今すぐに自動車が來たとしても、これから東京驛までたつぷり五十分はかゝるから、向ふへ着くまでにや汽車は出ちまふし、困つたなあ。さうしたらいつそのこと十一時のにするか。』と、獨言のやうにいふ。

京枝は笑つて、

『そりや旦那、今八時五十分ぢやとても無理ですわ。十一時にもう一つ汽車があるんなら、それになさいましよ。さうすりや今戸の旦那もどんなにお喜びになるか知れやしませんわ。』

相川は頻りに考へながら、

『それにしたつて、もう自動車が來たら、ぶう〳〵出かけなけりやなりませんからなあ。』と、云つて、急にそゝくさ歩き出しながら、『いや、京枝さん、兎に角急いで彼方へ歸りませう。どうも酒つて奴は命取りで、つひ盃が重なると腰が重くなるんでねえ。は〵〵〵。』

『そりや仕方が御坐いませんわ。その爲めのお酒なんですもの。ほゝゝゝゝ。』

そんなことを話しながら歩いてゐるうちに、道は漸次と先刻の方角とは違つた方へ出ていくやうで、とみると、いつの間にか遠くに見えてゐた工場の煙突が鼻の先へ現はれてくる。道のすぐ下には泥濘いやうな堀割が昏闇の中に薄白くほのみえて來て、その向ふには大川の川面が工場の塀の間に廣々と開けて來た。對岸の灯影はうるんだやうに紅く水に落ちて、よくみると、千住の瓦斯タンクらしいものが、樹立のうへにそれとなくみえて來た。

相川はそれをみると、何んだか變な氣がして、

『京枝さん、變な處へ出て來ちまひましたなあ。道が違やあしねえんですか。』と、云つて、とある石橋のうへ〻立止つてしまつた。

二十四の六

京枝もさう云はれると、やつと今氣づいたやうに立止つて、

『あら、さう云へばこの道は何んですか、河岸の方へ行くやうですのねえ。お待ちなさいましよ。』と、云つて、考へるやうな風をしながら、『私も初めて來たんで、よく分りませんけれど、でも先刻自動車で來た時には、この道を眞直にいつたやうに覺えてゐるんですがねえ。さうぢやないでせうか。』と、いふ。

相川は闇を透かしてみながら、『さあ、私にやまるで覺えがないんだが、併し兎に角先刻みえてゐた工場の煙突がこれなんだから、もつと左へ入つていかなくちや可けねえに相違ないですよ。まあ、それぢやもう一度先刻の酒屋の角まで引返して、あすこから畦道へ出る方が無事ですよ。もう一度向ふへ歸りませう。』と、いふ。

京枝は頻りに彼方此方を打眺めながら、

『でも、何しろあのお宅は河の岸にあるんですから、これを眞直に行つて、河岸を左へ入りやいと思ふんですが、……』と、云つてゐたが、相川は委細構はず、ずん〻もと來た道の方へ歸つていくので、やがて漸々自分もそつちへ引返していく。

二人はやつとのことで先刻の酒屋の角まで引返して來た。そこから又暗い畦道へかゝつた。相川は云はゞ敵ばかりの中へたつた一人殘して來たお歌のことが急に心配になり出して、もう京枝とは口もきかずに、自分が先へ立つてせつせと歩いていつた。

京枝は息を彈ませながらあとからついて來たが、やがて、

『ねえ、旦那、もう少しゆつくり歩いて下さいましな。私や何分にも足溜が惡いんで、歩き慣く

つてしようがないんですもの。』と、甘えるやうにいふ。

相川は相手にもしないやうな聲で、

『いや、これくらゐな道なら歩き慣いツてほどでもないですよ。それよりもあんまり時間がかゝるんで、お歌さんがさぞ心配してゐるだらうと思つてねえ。何しろ早く歸つてやらなけりや、……』さう云ひながら彼は、又一層歩調を早めていく。

その畦道が盡きて、小高い坦道へ上ると、今戸さんの家は間もなく、左手の樹立の中にみえて來た。

相川はそこを出てから、もう彼此三十分近くにもなるので、唯一途に氣がせいて、もう京枝の方なぞは振返りもしずに、すぐさま門から玄關へ入つていつた。そしてそのまゝ家の中へ上つたが、ふつと聞くと、二階座敷は先刻と違つて、いやに森と靜まり返つてゐる。もう今戸さんの笑聲もしてゐなければ、人の話聲さへ洩れて來ない。

相川は不審に思つて、態と足音を高く響かせながら階段を上つていつたが、先刻の座敷へ入つてみると、どうしたのか、そこには今戸さんもゐなければ、お歌もゐない。唯餉臺の正面のところには、島田がたつた一人で、先刻のまゝの席へ大跌坐をかいて、ちびり〳〵手酌で酒を飲んで

ゐた。

相川はその様子をみると、稍ぎくりとしたが、態とさあらぬ顏で自分も又もとの座へいつて坐りながら、

『やあ、どうも失禮しました。』と、云つて、置き忘れていつた煙草の袋を取上げる。

島田はぢろりとその様を上眼でみながら、薄ツ氣味惡くにや〳〵して、

『いや、どうも電話が遠いんで、さぞお困りでしたらう。何かお店で急な御用事でもあつたんですか？』と、盃をふくみながら訊く。

相川は煙草に火をつけながら、

『いや、別に用事つて程のこともねえんですが、やつぱり私共のやうな商賣は何かと煩いことがあるもんですから。』と、浮の空でいつて、今にもお歌が出て來るかと思つて、心待ちに待つてゐた。併し何處からも足音ひとつ聞えては來ず、それに京枝までが二階へは上つて來ようともしなかつた。

二十四の七

島田は自分の飲んだ盃をゆすいで、相川の方へ居坐り寄つて來ながら、
『いや、別に御用事がなけりや何よりですよ。まあ、どうかひとつお受けなすつて。』と、云つて盃をさす。
相川は手を振つて、
『いや、島田さん。有難う御坐んすが、私になら、もう結構で御坐んすよ。もう先刻からあんまり頂いたんで、すつかり酩酊しちまひましてなあ。は〻〻〻。』と、云つて、少し體を退きながら
『それにもう自動車の迎ひも直ぐにやつて來ますから、そろ〳〵お暇もしなけりやなりませんし。……』
島田は盃を押しつけるやうにしながら、
『いや、まあ、い〻ぢや御坐んせんか。どうせこれからぢや九時半の汽車も駄目なんですから、今夜はひとつゆつくり飲らうぢやありませんか。私の盃だつて、何も毒はついちやゐませんから。』
相川は仕方がなしに盃を受けて、島田に酌をして貰ひながら、
『いや、もう結構です。それよりもお歌さんは何うしましたらう。』と、氣懸りさうに訊く。

と、島田はきよとりとしたやうな顏で、
『あ、お歌ですか。お歌は今しがた便所を借り度えとか云つて、階下へ降りていきましたよ。もう上つて來るでせう。』と、云つて、そのまゝ相川の顏を眞面にみながら、
『ねえ、相川さん。ほんとにいつぞやは大變に失禮なことを申しに上つて、まことに申譯もありません。私もあとから大に後悔じまして、是非一度お詫に上らうと思つてゐたんですが、どうもその敷居が高いんでねえ。それに今夜も先刻からどうかして御挨拶をしようと思つちやゐたんですが、皆さんの前ぢやうつかりした口もきけねえんで、つひ失禮をしちまひまして。』と、いふ。
相川は苦笑ひをしながら、さ〻れた盃をぐつと飲んで又島田に返しながら、
『いや、島田さん、あの日のことはお互ッこですよ。もう い〻ぢやありませんか。過ぎ去つたことをいざこざいふにも當らねえから、今夜序にさらりと水に流してしまはふぢやありませんか。』と、云つて、又煙草をとつて、『それにしても、今戸さんは何うなすつたんです。彼方も便所ですか?』と、訊く。
島田はにやりと笑つて、銚子を取上げた。

二十四の八

島田は又なみ〳〵と自分の盃へ酒を注いで、態と落着き拂つた顏で、それをぐうッと飲みながら、

『今戸さんですか。今戸さんは今乾兒の連中が何か急な用があつて訪ねて來たとか云つて、階下へ下りて行きましたよ。貴方階下でお逢ひになりやしませんでしたか。』と、白ばツくれた調子でいふ。

相川もその顏つきでどうも怪しいと見て取つて、ふゝんと鼻の先で笑ひ返しながら、

『あゝ、さうですか。階下にや誰方もおいでがないやうでしたが……。』

さう云ひかけてゐると、そこへ迎ひの自動車がいよ〳〵やつて來たとみえて、門の外のところで俄に轟々とエンジンの音が聞える。少時すると、その音はぴたりと止つて、やがて運轉手の靴音らしいものが、こと〳〵此方へ入つて來た。

と、その途端に、先隣りあたりらしい座敷で、突如にどたばたと何かゞ倒れるやうな音がしてかすかな女の呻き聲が聞える。それは口を何かでしつかりと押へつけられてゐるやうな聲で、今

にも息が絶えさうな怨ろしい呻き聲であつた。

相川はそれを聞きつけると、悸乎として俄に顏色を變へながら立ち上らうとしたが、島田はそれをぢろりとみて、又銚子を取上げる。

相川は今の呻き聲はたしかにお歌だと思つて、そのまゝもう猶豫もなく撥ね上るやうに片膝で立つて、島田を睨めつけながら、

『おい、島田さん。今なあお歌さんの聲に違えねえが、笑談しちや可けねえぜ。』と、眞蒼な顏に嘲りを含んでいふ。そして彼はそれとなく身構へしながら、今にも聲のした座敷の方へ踏ン込んでいかうとした。

島田は悠々とした樣子で盃を含んでゐたが、それをみると、急に彼も引緊つた險相な顏になつて、一寸間を置いて、今度はがらりと調子を變へながら、まるで破戸漢のやうな言葉つきで、

『おい、靜かにしろい。もうかうなつちや、卑怯な隱し立てはしねえ。お前さんのお察しの通り今なあお歌の聲だ。それがどうしたといふんでえ。』と、いふ。

相川は張り切つた態度で、肩を聳やかしながら、

『おい、島田さん。巫山戲た眞似もいゝ加減にして呉れ。ひよつとしたらこんな謀計をしやしね

えかと思つてゐたが、到頭やりやがつたな。お歌さんをあんなところへ押込んで、一體どうしようといふんだ。』

島田は大跌坐をかいたまゝで、

『知れたこつた。俺あ自分で手引きをして、昔の情婦のお歌を今戸さんに賣つたんだ。今日日の五百兩と來たら、俺の生命とかけがへになる金だからね。はゝゝゝ。相川さん、いつぞやお前さんの家で、覺えてゐろと捨て臺白を殘して來たなあ、此處のこつたぜ。おい、分つたかい？』と、顏に似合はず飽く迄太々しくいふ。

相川はもうかツとして、

『畜生奴ッ、利いた風なことを吐かしやがんねえ。よし、それならそれで俺も了見がならねえから、向ふへ踏込んでいつて、何うするかみてゐろッ。』と、叫んで、彼はづか〳〵と殺氣を含んで隣の廊下の方へ出てゆく。

島田はその時飛鳥のやうに身輕に立つて來て、いきなり相川の前へ立塞がつた。とみると、彼の右の手には氷のやうな匕首がきらりと光つてゐた。

二十四の九

相川は匕首を見ると、さすがにぎくりとしたが、それでも氣が立つてゐるので、びくともしないやうな顏で、ぐッと島田を見据ゑながら、

『おい、島田さん。そんなものを出して、何うしやうつてんだい。そんな時代な眞似をしたつて俺あびくともするんぢやねえ。お前さんも男なら、そんな灰汁の脫けねえ眞似はよしにしなせえ。兜町の荒え波を喰つて生きてる俺だ。はゝゝゝ。さあ、退いた、退いた。』と、叫んで、猶ほも向ふへ驅けぬけようとする。

と、島田はぴか〳〵光る奴を、今度は相川の鼻の先へ突きつけて、彼の胸を左の手でどんと衝きながら、

『生意氣を吐かすねえ。もうかうなつちや、いくらじたばたしたつて、何うにもなりやしねえんだ。此の家の周圍にや足場のうへで生命の遣り取りをする今戸の乾兒がちやんと控えてゐるから下らねえ腕だてをすると、それこそお前さんの生命はねえんだぜ。だからまあ、今夜はこの儘お歌を今戸さんへ預けて、素直に引退つた方がお前さんの身の爲めだらうぜ。兜町のいなせな旦那

か知らねえが、このドスを見ちや、から意氣地がねえや。それみろ、ぶる〳〵慄えてゐるぢやねえか。は〳〵〳〵。』と、大きく笑ふ。

相川は憤怒の眦を決して、

『何んだと、云はして置きやつけ上りやがつて。緣日仕込みの鈍刀なんぞ振り廻されて慄へるやうなら、こんな處へ素手で乘込んで來やしねえ。さあ、そこを退け。お前は知るめえが、今の電話は警察からお前の在處を探してゐるつて報せなんだぜ。もうちやんとヅキが廻つてゐるんだ。お前こそこんな處にうろ〳〵してゐられる體ぢやあるめえ。芝居もどきの臺白なんぞ云ひやがつて、町面で道草を喰つてゐるよりも、高飛びをするものなら、さつさと高飛でもした方がそれこそ身の爲めだぜ。さあ、そこを退けッ。』と、云つて、彼は勇敢に島田を突退けて、奥へ踏込んでいかうとする。

島田はよろ〳〵ッとして、屹と身構へしながら、

『何だと、此の野郎。そいぢやお前警察へ密告しやがつたな。よし、さうなりやもう自棄だ。何うするか覺えてゐろッ。』と、叫んだかと思ふと、彼は血相を變へて、眞氣になつて、相川の方へ躍り懸つて來た。

相川は勢ひ込んで來る奴をぐいッと肩で外して、平手でぴしりと島田の頰桁を撲り付けたが、島田はそれでもひるまずに又斬りかゝつてくる。相川は今度はその腕を咄嗟の間に引掴んで空を斬らせながら、彼の肩へ手をかけて、力一杯にぐい〳〵と紙襖の方へ押し付けていつたが、その途中に煙草盆があつたので、島田はそれへ足を突込んで、思はず又よろ〳〵と蹌めく。その隙に相川は一氣に押し倒さうとしたが、力が餘つて、今度は自分も一緒に足を掬はれさうになつた。

その時、奥座敷では又魂消るやうなお歌の悲鳴がひと聲長く聞えた。

二十四の十

お歌の呻めき聲はまるで針を打つやうに鋭く相川の胸に響いて來た。彼はさうなるともう無我無中になつて、猶更力一杯に島田を押倒さうとしたが、島田はそれでも一度は踏み應へて、

『何糞ッ、手前一人位打殺せねえやうな俺ぢやねえんだ。』と、必死になつて、爭つてゐた。そのうちに何うした彈みだつたか、折角踏み應へてゐた彼の左の足が、煙草盆が引覆へると一緒にするりと前へ滑つて、島田はひと滑りもなく仰向に堂と倒れてしまつた。

相川はしめたと思つて、重なり合つて倒れながら、どうかして兇器をもつた右の手を押へ込ま

うとしたが、島田も力の限り爭つて、中々自由にさせない。匕首はきら〳〵電光のやうに光つて傍でみてゐてもひや〳〵するやうな危機が迫つてゐた。

相川は何うしてもうまい工合に島田を押へ込むことが出來ないので、ひどく氣を焦つて、早く勝味をつけめやうと思つて、今度は最後の力を揮つて島田の二の腕を引掴みながら、馬乘りにならうとした。二人はまるで野獸のやうに恐ろしく呻きながら、もう汗みどろになつてゐた。

さうして揉み合つてゐるうちに、島田は今度は相川の首へやつと手を廻して、ぐいと自分の方へ引寄せたかと思ふと、相川は少し疲れて來たのか、思はず腰を浮かせる。その途端に彼は、『あッ痛えッ。』と、叫んだが、とみると、島田は二の腕を握られたまゝ、相川の眼から頰へかけて颯と一太刀浴せかけたのであつた。傷口からはまるで糸を引くやうにぷッ〳〵と鮮血が迸り出て、島田の顏のところへもその血がぽた〳〵と滴り落ちて來た。

島田は首を振つて、相川のひるむ隙へ附込んで、

『此ン畜生ッ。』と、叫びながら、いきなり寢返りを打つたので、相川はもう耐力もなく横手へ振り落されてしまふ。島田はそのまゝ素早く刎ね起きて、有無を云はせず相川の胸を眼蒐けて、逆手に持つた匕首を力任せにぐいッと突刺した。

相川はそれと一緒に、

『うむッ。』と、叫んで、體を海老のやうに押縮めたかと思ふと、もうぐたりとなつてしまつた。彼の絹の羽織にはみる〳〵眞紅な血が一面に滲んで來て、彼は片足を激しく打慄はせながらもう一度息を引くやうに長く唸めいた。

島田は眞蒼になつた顏に、眼ばかりぎろ〳〵光らせながら、相川の顏を上から見据ゑてゐたが、やがてにたりと狂人のやうに笑つて唾でも吐くやうな調子で、

『ふん、態アみやがれッ。』と、呟いたかと思ふと、そのまゝ立上つて、相川の羽織で一寸手を拭いて、その足で、次の間へ通ふ紙襖を開けて向ふへ出ていかうとした。

その時、相川はどうしたのか、もう一度起き上らうとして、

『おいッ誰れか、來て呉れえッ。人殺しだッ。』と、腑のぬけたやうな聲で叫んだが、血をみて狂暴になつた島田はそれを聞きつけると又取つて返して、今度は相川の顏や胸を散々に踏んだけり蹴据ゑたりした。

間もなく相川は物凄いまでに血に塗れたまゝ到頭靜かになつてしまつた。

二十五の一

廣間から、中の六疊を一間置いて向ふの、鍵の手になつた四疊半では、その時、口にするのも忌はしいやうな罪惡が行はれてゐた。その間の床の間のところには蒲行燈の形につくられた置電燈がほの暗い光を投げて、張交ぜの屏風の陰にはお歌がまるで死んだやうにくた〳〵になつて、仰向けに倒れてゐた。彼女は風呂敷のやうなもので、しつかりと口を掩はれ、兩手は細帶で緊縛されて、もうまるで身動きも出來ないやうにされてゐた。帶は半分解けて、着物の前裾はしどけなく披かつて、麻の葉の長繻絆の裾からはわな〳〵と打慄へるむつちりと白い細脛があらはにみえてゐた。彼女はもう我を忘れて口惜しげに啜り泣いてゐるとみえ、時々體中がさながら木の葉のやうにぶる〳〵と慄へて、異樣な嘆れた呻き聲が辛うじて洩れ聞えて來る。彼女はもう何をする力もなくなつてゐるうへに、半精神は朦朧としてゐるのであつた。

屏風の陰には誰か人がゐるとみえ、さら〳〵と衣摺れの音のやうなひそやかな囁きが聞えてゐたが、やがてそこからは今戸さんの大きな體がぬうッと出て來る。彼はひどく醉つてゐるとみえ、足許がふら〳〵と定さらなかつたが、そのまゝがつしりお歌の側へ坐つて、ものも云はずに、彼

女の傷はしい顏にじいッと見入つてゐた。

その時、ふつと聞くと、中の間の紙襖が開いて、誰かゞ此方へ入つて來るやうな足音が聞える。今戸さんはそれを聞きつけると、稍居坐ひを直して、どろんとした醉眼をそつちへ向けたが、その紙襖の外では、『旦那、旦那。入つてもようございますか。』と、いふ急き込んだ聲が聞える。

今戸さんはよくみると、肩で息をしながら、

『おう、入つてもいゝぞ。』と、答へる。

と、そこの紙襖はすうッと開いて、島田が鉛のやうな眞蒼な顏をして、入つて來た。

今戸さんはその樣子をみると、悸乎としたやうに、彼の顏を見据ゑて、

『おい、島田、やけにどたばたやらかしたぢやねえか。もうちつと手際よくやらねえと、女が脅えて仕樣がありやしねえぜ。』と、いふ。

島田はわく〳〵してゐるやうに手ばかり動かして、

『旦那、旦那。濟みません。私や到頭彼奴を……』と、だけいふ。

今戸さんは屹と眼を据ゑて、血みどろな島田の手を見ながら、

『なに？　彼奴を殺つちやつたのか？』と、二度吃驚したやうに云つて、『ほんとに仕樣のねえ野

郎だな。何んだつて又そんな荒療治をやつたんだ。俺あ何にもそこまでやれたあ、頼みやしねえぜ。ほんとに何うしたといふんだな。』と、少し脅えたやうにいふ。

島田はそのまゝそこへ腰を下ろして、頭を掻きながら物凄くにやり〳〵と笑つてゐた。四邊は森として、眞夜中のやうに靜かであつた。

二十五の二

島田はやがてじろりとお歌の方をみて、少し眞顏になりながら、

『いや、私だつて何にもさうまでにやらかす心算ぢやなかつたんですが、實はその、あの相川の奴め私がこゝにゐることを警察へ密告しやがつたもんですから、私も癪に觸りましてねえ。初めは毒氣をぬいてやるつもりで、ドスを見せたんですが、彼奴め、眞氣になつてかゝつて來やがつたんで、つひ私も夢中でやツつけちやつたんですよ。』と、いふ。

今戸さんは眉を顰めて、

『それで、もう彼奴あすつかり息が止まつちやつたのか。それともまだ脈はありさうか？』と、訊く。

島田は首を垂れて、

『いや、もう心臟をぐいとひと突き喰らはせましたから、とても駄目ですよ。もう少しじたばたしやがるかと想ひましたら、人間なんてものは、存外多愛もなくころりと參るもんですなあ。』と、笑ひながらいふ。

今戸さんは考へ深い顏になつて、

『だが、お前もいゝ惡黨だね。人間を一人殺らして、それだけ落着いてゐられりや大したものさ。ほんとに糞度胸の据つた男だなあ。』

島田は今度は苦笑ひをして、

『だつて旦那、もうかうなつちや何うにもしようがねえぢやありませんか。もとのとほりにしろつたつて、もう何うにもならねえんですもの。度胸でも据ゑてゐなけりや、私や自分の體を持て扱つてしまひまさあね。』と、不貞腐れた口調でいふ。

今戸さんはその顏を屹とみて、

『併し島田、もう出來ちやつたことは仕樣がねえが、一體あとの始末はどうするんでえ。この儘にして置かれちや俺が困つちまふからなあ。』

島田はそれでも力なく手を振つて、

『いや、旦那、どうかそいつあ御心配なさらねえで下せえ。私もかうやつて、自分で買つて出た仕事だ。それに金も澤山頂いたんですから、私の責任だけは何處までも脊負ひますよ。』と、云つて、少し悄氣たやうに、『それに何うせ、相川の店へまで手が廻るやうぢやもう私の壽命も極つてゐまさあ。何方へ高飛をしたつて、末は踏捕まるに極つてゐるんですもの。いつそもう私も腹を極めて、年貢を納めちまはふかと思つてゐるんですよ。これでお閻魔様のお白洲へ引出されるにや不足のねえ兇狀ももつてゐますからなあ。はゝゝゝゝ。』

今戸さんはその大膽な樣子を稍呆れてみてゐたが、やがて、

『そりやお前のこつたから、何うしようと勝手だが、併しゝ若者の癖に、そんな佛臭え量見を起すなあ、あんまり意氣地がなさすぎるぢやねえか。ほんとにしつかりしろよ。ちやんと跡形づけせえしていきや、あとは又何うにでもなるぢやねえか。え、おい、島田、東京ばかりが日の照る國でもねえからなあ。』と、今戸さんは島田の顏を見込んで、腹の底から出るやうな聲でいつた。

二十五の三

島田はさう勵まされても、別に興奮もしずに、

『いや、旦那。そりや私だつて、どうかしてもう少し此婆にゐ度えなあ山々ですが、併し人間て奴あ、往生際が肝腎ですからなあ。私も考へてみると、今迄に隨分よくねえこともやつて來てゐるんですし、それに相棒の今宮は上げられちやつたんですし、そのうへ又相川を殺らしちやつちやもう、とても遁れる道はありやしませんや。又遁れようつたつて、警察の方で遁しやしねえに極つてゐまさあ。ですからもういつそさらりと思ひ切つて、今度こそ年貢を納めちまふんですなあ。』と、しほ〳〵しながらいふ。

今戸さんも聲を落として、

『ぢや島田、お前は自首でもする氣か。』と、訊く。

島田はその顏を勢のない眼で見返して、

『さあ、まあ、さうでもするより他にやしようがあるめえと思つてゐるんですよ。さうかうしてゐるうちにや、もう警察からこゝへ踏ん込んで來るかも知れませんし、こゝでむざ〳〵踏ん縛られるなあどう考へても氣の利かねえ話ですからなあ。それよりもいつそ男らしく自首して出た方が、私やいゝと思ふんですよ。』

今戸さんは腕拱みをして、一語も發しない。

島田はやがて氣をせいて、

『ねえ、旦那、それよりも貴方はもう仕事が濟んだんだから、何は兎もあれ、先刻お打合はせをしたやうに、河岸へ待たしてあるあのモーターボートで、向ふ河岸へどろんでおしまひなさいよ。さうしねえと、どんな懸り合ひになるか知れませんからなあ。』と、いふ。

今戸さんもさう云はれると、もぞ〳〵しだして、

『うむそれもさうだなあ。併しこのお歌は何うしたもんだらう。この儘にして置いていゝかな。』

と、心配さうにいふ。

島田は一人で引受けてゐるやうに、

『なあに、これのことは構やあしませんや。私がうまい工合に納まりをつけますから、御安心なせえ。旦那も、これで男の言分はとほつたんだから、もう何ち未練をお殘しにならなくつたつていゝでせう。それよりも早く旦那、この場をお外しなすつて下せえ。その方が急ぎますから。』といふ。

今戸さんも思ひ切つて立上つて、

『島田、それぢや俺あ、あの京枝を連れて、このまゝ家へ引上げるから、お前もそんな自首するなんてケチな考へを起さずに、何んとかして、家まで遁げて來いよ。いゝか。さうすりや俺も金をもたせて、平の親分のところへでも落としてやるから、決して短氣を起しちやいけねえぜ。そのかはりあのことはよろしく賴むぜ。さうして家で一杯飲めるやうに支度をして待つてゐるからなるだけ早く此方の始末をして、遁げて來いよ。いゝか、分つたか。』と、云ひながら、彼はもう遁げるやうに、次の間の方へ出ていつた。

島田は、茫然とそのあとを見送つてゐた。彼の眼にも、さすがにその時は、絶望の色がくつきりと現はれてゐたのであつた。

二十五の四

島田はたつた一人になると、そのまゝ腕を拱んで、默つて考へ込んでゐたが、やがて彼は重さうな體つきでずる〳〵お歌の頭の方へ居坐り寄つて、ほの暗い行燈の光で、もう一度、彼女の顏をじいッと覗き込んだ。

お歌は口から頰の半分と、それから蜂谷の方まで風呂敷樣のもので、しつかりと緊縛されてゐ

るので、今迄今戸さんと島田が話してゐたことも耳へは入らないらしく、先刻のやうに眼を瞑つたまゝ唯時々思ひ出したやうに嗚咽を嚙み緊めてゐた。頭髪は散々に崩れて、涙に濡れたその顏はもう血の氣もないほど蒼ざめてゐた。

島田は瞬きもしずにじいッといつまでもその顏を見守つてゐたが、やがて彼の顏には何うしたのか忽如として狂暴な色が現はれて來て、彼はいきなりお歌の胸へ手をかけたかと思ふと、彼女の體をやけに搖り動かした。それでもお歌は意識が朦朧としてゐるとみえて、眼も睜かずにされるまゝになつてゐる。

島田は二三度お歌の體を搖すぶつてみて、今度は何んと思つたか、すつくと立つて、それなりお歌を力任せに抱き上げて、なるべく音のしないやうに廊下の方へ引摺り出していつた。そしてやつとのことで、階段のところまで引摺つて來ると、一度階下へ下りて四邊の樣子を窺づたあとで、又階上へとつて返して、まるで熊が獲物でも擔ぎ出すやうに、お歌の肩を脊中へ脊負つて一段々々足許を探りながら階下へ引下ろした。

階下では誰れもゐないのか、物音ひとつ聞えない。

島田はやう〳〵のことでお歌を階下の廊下へ下ろすと、そのまで自分は跣足で庭へ下りて、お

歌を横抱きに引抱へたまゝすた〳〵河岸の方へ連れていつた。お歌はそれでもまだ人心地がつかないのか、まるで腑がぬけたやうにくな〳〵して長繻絆の裾から白い足先をずる〳〵地面へ引摺りながら、多愛もなく運ばれていつた。

丁度母家から裏へ廻ると、植込みの向ふに三尺ばかりの堤のやうなものが續いてゐて、その向ふは隅田川だつた。そこには夜目にはそれとも分らなかつたが、何んでも棧橋のやうなものがあつて、石燈籠や飛び石のやうなものも彼方此方にあるやうで、裏座敷からは相當に眺めのある庭にでもなつてゐるやうであつた。

堤のうへゝ上ると、すぐ下には河波の音がぴた〳〵と聞えて、隅田川は夢のやうに煙つてみえてゐる。河面には船の櫓聲も絶えて、對岸の灯影が長く、靜かにちろ〳〵と落ちてゐる。黑い水は音もなく流れて、四邊は氣味の惡い位ひつそりしてゐたが、今今戸さんの乘つたモーターボートらしいのが中流の邊に漂つてゐて、その發動機の音だけが脈打つやうに遠く河下の方へ流れていつた。

島田は堤の上にあるこんもりした柳の樹影へいつて、お歌をそつと下すと、河面を彼方此方と眠で探りながらほッと安心の息を入れた。

二十五の五

島田は少時すると、もう一度四邊の様子を窺つたあとで、彼はそツとお歌の口を掩つた風呂敷を解いてやつた。風呂敷の結びめは、しつかりと髢の中へ喰ひ込んでゐるので、島田はそれを解くのに可成苦心したのであつた。それでも漸くのことでそれを解くと、彼はそのまゝお歌の肩へ手を廻して、力一杯にじいッと自分の胸の中へ抱き竦めた。

お歌はそれでもされるがまゝに身を任せてゐて、少しも反抗しようとしない。島田はもう焦れ切つてゐるやうに、やがてお歌の耳へ口を寄せて、

『おい、お歌、お歌。しつかりしねえ。そんなにくな〳〵してゐちや何うにもならねえぢやねえか。おい、お歌。』と、呼ぶ。

と、お歌はその時、ぐいッと足を縮めて、伸びでもするやうに、深い息を吸入れたがそれと一緒にぽッかり兩眼を開いて、まるで夢でもみてゐたやうに、そこいらをまじ〳〵見廻す。

島田はもう一度彼女の體を抱き緊めて、

『おい、お歌。しつかりしなッてば。まだお前正氣がつかねえのか?』と、云つたが、と、お歌

もその聲で島田と分つたかして、いきなりまだ縛られてゐる手をはげしく搖り動かして、

『島田さん、私厭です。こんな目に逢はせて私、口惜しい。さ、早くこの繩をとつて、私を、私を自由にして下さい。後生ですから私を許して下さい。』と、浮づゝた聲で叫ぶ。

島田はその顏を胸へ押しつけるやうにしながら、

『おい、お歌、靜かにしろッたら。もういくらお前が騷いだつて、何うにもなりやしねえぢやねえか。お前が溫和しく云ふことを聞きや誰れもこんな手荒な眞似はしやしねえんだ。ほんとに人に手數をかけさせやがつて、仕樣のねえ奴だ。』と、云つて、その顏を覗き込みながら、頰摺りをしようとした。

お歌は體を反けぞらして、

『島田さん。ほんとにどうかこの手と足を解いて下さいッたら。あんた方はほんとに卑怯ぢやありませんか。私をこんな酷い目に逢はせて……さ、この繩を解いて下さい。』と、夢中になつていふ。

島田はにたりと笑つて、

『おい、お歌、まあ、靜かにしろッたら。繩を解いてやつてもいゝ時が來りや、默つてゐたつて

解いてやらあな。もし少しの間の辛棒だ。まあ、兎に角俺の云ふことを聞いて呉んな。そんなに暴れるんぢやねえつてことよ。いくらじたばたしたつて、この繩あ解けやしねえよ。さ、かうして少時の間じいッとしてゐねえ。』と、云つて、小供のやうに抱きすくめて動かせまいとする。

お歌は頻りに身を蹶きながら、

『厭です。厭ですツてば。』と、泣き聲で喚く。

島田は聲を立てさせまいとして、又片手でお歌の口をしつかりと押へ込んだ。

二十五の六

島田は少しお歌が靜かになるのを待つて、耳へ口を寄せるやうにしながら、

『なあ、お歌。お前ももうかうなつたら、どうかようく氣を落ち着けて、俺の云ふことを聞いて呉れ。全くお前の云ふ通り、今夜俺がしたことは確に卑怯だ。卑怯どころか、もう言語道斷な遣り方だといふことも俺あよく知つてゐるんだ。併しお歌、俺あ全くのところかういふことをしなけりや、自分がもう何うにも出來なくなつてしまつたんだ。だから俺のしたことはどうか許して呉んな。それだけは俺何處までも謝るよ。』と、やさしい聲で云つて、『そこでだ、俺あ實はお前に

折入つて頼み度えことがあるんだ。なあ、お歌、昔からのことを考へりや、お前だつて俺とは萬更赤の他人でもねえんだから、まさか俺の云ふことを聞かねえとも云へめえ。なあ、お歌。』と、しんみり云ふ。

お歌は口を抑へられてゐるので、唯體をもぢ〳〵させるばかりであつた。

島田はお歌の耳朶へ唇をくツつけて、

『なあ、お歌、俺の頼みといふなあ他でもねえが、なあ、お歌、お前ももうこんな目に逢はされて、傷の入つた體だ。それにもう今夜ッからお前はいかに何うしたつて、到底末始終仕合はせにやなれねえ體になつてしまつたんだ。だから此處でいつそお前も此の婆婆に斷念をつけて、俺と一緒に死んで呉んねえ。俺あもう何うあつても、生きちやゐられねえ體なんだ。かうしてゐるうちにも俺あいつ刑事に踏込まれて、この手が後へ廻るか知れねえんだ。だから俺ももうすつかり見切りをつけて、お前を道連れに、この娑婆におさらばと出懸けようかと思つてゐるんだ。俺あ今だからいふが、お前ばかりや一生に一度、もうそれこそ、何も彼も遣りで惚れた女だ。そのお前と一緒に死ねりや、俺にとつちやこんな仕合はせなことはねえんだからなあ。おい、お歌、ほんとにお前の身になつてみると、可哀想で耐らねえが、併しお前だつてもうとても此の世に生き

ちやゐられねえ體なんだぜ。お歌、ほんとに死んで呉んな。俺後生一生の頼みだ。』と、いふ。
お歌はその時、島田の手が緩んだので、俄に消魂しい叫び聲をあげて、
『あれッ相川さん、相川さん。早く來てえッ。』と、いふ。
島田は慌てゝ又その口を押へつけながら、恐ろしい調子で、
『やい、お歌、そんな聲を出すなつたら。この期になつて、未練なことをいふと俺あ承知しねえぞ。お前がいくら厭だといつても、俺あもう覺悟を極めてゐるんだからどうあつてもお前を一緒に連れていくんだ。生意氣に聲なんぞ立てやがると、もう有無を云はせずに此れだぞ。』と、云つて、彼はそのまゝ先刻の血みどろな匕首をポケットから取出して、お歌の鼻の先へ突つける。
お歌はきらりと光る鋒をみると、もう必死になつて、島田の胸から自分を自由にしようとした。併し手も足も緊縛されてゐるので彼女は唯徒に身を悶くばかりであつた。

二十五の七

お歌はそれでもやつと、肩を地面の方へ滑らして、島田の手を口から放しながら、
『島田さん、私、厭です、厭です。貴方と一緒に死ぬなんて、そんな、そんなこと厭です。私には相川といふ良人があるんです。あんたも、今になつて、そんなことをいふのは男らしくないぢやありませんか。島田さん、どうか、どうか許して下さい。私、もう……』
島田はもう我を忘れてゐるやうに、
『おい、默れ、お歌。いくらお前が何んと云つたつて、俺許しやしねえぞ。もうかうと思ひたつたら、俺何處までも自分の思ひ通りにするから、お前もその覺悟をしなよ。』と、云つて、息を呑みながら、『おい、お歌、お前はまだ知るめえが、俺あ實は今、あの相川をこの匕首で殺ツつけちまつたんだぜ。だから、いくらお前が大きな聲を出したつて、もう相川の耳にや入りやしねえんだ。』と、いふ。
お歌は首を振つて、
『いゝえ、そんなことは僞です。そんなことを云つて、私を誑さうッたつて、駄目ですわ。ねえ、貴方ほんとに、後生ですから、私を、私を許して下さい。私、もしお金が要るんなら、いくらでも都合して、あんたに上げますから、どうか私を殺すのだけは勘忍して下さい。私お願ひですから。』と、云つて、彼女は芝草のうへゝ額を埋めるやうにして哀願した。
島田はその樣をじいッとみてゐたが、やがて又聲を落として、

『お歌、それぢやお前はまだあの相川が生きてゐると思つてゐるのか。』と、云つて、『そりやお前は現場をみてゐねえから、さう思ふのは無理やねえが、實は俺あ彼奴が俺を警察へ密告しやがつたことが分つたんで、あんまり腹が立つたから、ひと思ひに殺ッつけちまつたんだ。嘘だと思ふんなら、まあこれをみねえ。匕首やこの通り血みどろだ。それにこの俺の手へ觸つてみな。この通り血だらけだ。』と、云つて彼は血糊でばさ〳〵になつてゐる手をいきなりぐいとお歌の頬へ押付けた。

お歌はその肌觸りでぞッとしたとみえて、突如、我にもなく、

『あれッ。』と、絶叫して、體を揉みながら、堤の下へ轉げ落ちやうとする。

島田は慌てゝそれを押へて、

『おい、お歌、ほんとに靜かにして呉れッたら。今も云つた通り、もう相川もこの婆婆にやゐねえんだから、お前も性根を極めて、この匕首で俺と一緒に死んで呉れ。』と、もう一度云ふ。

お歌は狂ほしげな聲で、

『厭です、厭です、そんな嘘を吐いて、あれッ相川さん、相川さあん。早く助けてえッ。人殺ろしッ……』と、息も絶えだえに叫ぶ。

島田は、もうその聲で、かッとして、いきなり匕首を振り上げたかと思ふと、今にも風をきつて、お歌の胸を眼蒐けて、突刺さうとした。

と、その時、母家の方でどたばた人の足音がして、俄に表庭の方が騒然としてきた。

お歌はもう一度ある限りの聲を振絞つて、『人殺ろしいッ、人殺ろしいッ。』と、絶叫した。

二十五の八

島田は胸の底までものぶかく響いてゆくやうなその絶叫の聲を聞くと、もう今は之れまでと思つたか、少し腰を浮かして、

『やい、お歌、そんな聲を出しやがりや、もうこれまでだ。さ、長く苦しまねえやうに、たつた一息にあの世へやつてやるから、覺悟しろ。』と、云つて、振り上げた匕首を一氣に颯と打下した。

それと同時にお歌は、

『あッ……』と、ひと聲呻いて、横様にぐつたりと倒れたが、それでも急所を外れたかして、地面へつくばつたまゝ、必死の聲を振絞つて、

『あれッ人殺しッ、誰れか來てえッ、誰れか來てえッ。』と、叫んで、どうかして島田の手の下を

遁れようとする。女の一念といふものは恐ろしいもので、その途端に、どうしたのか、後手に縛られてゐた彼女はもう無我無中で、くゝつてあつた紐を引斷つて、それなり泳ぐやうにして、堤の下へころ〳〵と轉がり落ちていつた。

島田は重なり合ふやうに自分も芝草のうへを下へ滑り落ちて、

『やい、まだ聲を立てやがるか。こん畜生ッ。』と、云つて、今度は匕首をお歌の肩先眼蒐けて力一杯に突き立てた。

お歌は、はッ〳〵と息を切りながら、

『あれッ。』と、叫んで、それを外さうとしたが、力が餘つて、彼女はもうひと轉がり柳の根方の方へ轉がつてゆく。

島田は引摺られるやうに、そのあとを追つたが、その時、垂れ下つた柳の垂枝の尖が、思はずついと島田の眼を刺した。島田はぎくりとして、左の手で眼を抑へたが、その隙にお歌は又堤のうへゝ匍ひ上つて、今度はもう絶え絶えな聲で、もう一度、

『誰れか來てえッ、人殺しいッ。』と、叫んだが、島田はもうかッとして眼先も何も見えなくなつてゐるので、その聲をあてに、矢鱈無性に突いてかゝる。匕首を逆手にもつた彼の手はまるで機

械のやうに働くばかりであつた。

お歌はまだ兩足が自由にならないので、幾度かその鋒で腕や、背中を散々突き刺された。彼女はまくれ上つた二の腕から、片脛へかけて血塗れになつて、半面血に洗はれた彼女の形相はさながら惡鬼のやうに物凄かつた。もう彼女も聲をたてる勇氣もなくなつて、そのまゝ堤の腹へ逆樣にずり落ちて、うん〳〵呻きながら、蟲の息になつてしまつた。

島田もそれをみると、ほッと深い息をついて、

『態みやがれッ、俺の云ふ通りにすりや、そんな切ねえ目にや逢はねえんだ。さ、お歌、此方を向け、息の根を止めてやるから、……』さう云つて、彼はお歌の襟がみへ手をかけて、引起さうとしたが、その時、すぐ鼻の先の八ッ手の樹影からは、突如誰れとも知れない眞黑な人影がむッくと現はれて來た。それは一人と思ひの他、彼方からも此方からもばら〳〵ッと三人程此方へ驅け寄つてくるのであつた。

二十五の九

暗闇から驅け出して來た男の一人は、やつと二人の姿を見附け出したやうに、

『お、彼處だ、彼處だ。おい、田中君、君はそつちから廻つてくれ。兇器をもつて居るやうだから、氣をつけろ。』

『よし、裏は僕が引受けたから、それッ三谷君、向ふへ廻れ。』と、大聲でわめきながら、三人は忽ちにして島田を包圍してしまつた。それは春廣を着たり、詰襟を着たりしてはゐたが、いづれも素敏い樣子をみても、警察から出動してきた刑事であることは一目にして分つた。

島田はそれをみると、ついとお歌の傍を離れて、堤のうへゝ背丈一杯に立ち上りながら、

『やい、靜かにしろいッ。何處の奴等だか知らねえが、傍へ寄りやがると片ッ端から打殺してしまふぞッ。』と、叫んで、きらりと光る匕首を頭上に高く振かざした。

刑事達は油斷なく彼の一擧一動を窺ひながら、中の一人は、

『おい、島田。もう尋常にしろ。俺達は新場橋の警察から來た刑事だ。そんなつまらねえ腕立をしやがると却つて貴樣の不利益になるぞ。今橋場で、今戸の渡邊も上げられてしまつたんだから貴樣の手證はすつかり上つて居るんだ。だから手數をかけさせずに、尋常にしろ。』と、腹の底から出るやうな聲でいふ。

島田はそれをせゝら笑つて、

『何にを。そんな甘口に乘る俺と思つてゐるのか。はゝゝゝ。眼端の利かねえお役人達だなあ。俺あもうこの通り二人も人間を殺らしちやたんだから、この、婆婆にや未練も何もねえんだ。だからこの腕のつゞく限り手向えをするから、そのつもりで向つて來い。匕首だけで食ひ足りなけりや、短銃もあるぜ。さあ、來い。』と、不敵な態度で反對にこつちから刑事達の方へ躍り込んでいかうとする。

刑事達は隙をもみせずに島田の斬り込んでくる鋒を外しながら、

『生意氣なことを吐かすねえ。かうしたらどうするッ。さ、暴れられるなら暴れてみろ。』と、云つて巧に島田の體を扱ひながら、中の一人は素早く彼の首へ捕繩をかけてしまふ。

島田は多勢に無勢では敵はないので、捕繩をかけられたと一緒に、ぴよッと堤から飛び下りて今度はそこにありあふ梧桐の幹を小楯にとつて、防ぎ戰はふとする。併し彼の首へかゝつた捕繩は力一杯に手繰られてゐるので、そつちへともすると上半身を引寄せられるやうで、彼は唯焦れに焦れるばかりであつた。彼は七首をぎらぎら振り廻しながら、どうかしてその捕繩を切らうとしたが、その間に一人の刑事は飛鳥のやうに彼の背後から飛びかゝつて、右の足でばらりと彼を横事に薙倒してしまふ。

『畜生ッ、何うするかみてゐろッ。』

二十五の十

刑事の一人はそれをみると、すぐさま島田の側へ驅け寄つて、捕繩をゆるめながら、

『お、到頭やりやがつたな。おい、島田、貴様、今になつて自殺をするなんて卑怯ぢやねえか。さ、もつと男らしくしろッ。』と、云つて、彼は後から手を廻して、島田を引起した。

と、みると、島田はもう自分でもすつかり覺悟を極めたのか、七首をもつた手を腋の下へ深く突き入れて、肩で息をしてゐる。暗くてよく分らなかつたが、彼はその七首で心臟部のあたりを力任せに突き刺してゐるらしかつた。

もう一人の刑事は前からじいッと島田の顏を覗いてみながら、

『君、三谷君、大變な出血だぞ。此奴を殺してしまつちや、我々の仕事が無駄になつてしまふから、早速手當をせんけりやなるまい。まあ、兎に角そつとして、横に寢せて置けよ。』と、いふ。

と、三谷と呼ばれたその刑事も島田の軀をそのまゝ又芝草のうへゝ横に寢せて、彼の手をとつて脈をみようとする。

その時、島田はその手を力なく振り拂つて、

『やい、何をしやがるんでえ。俺、手前達の前で見事に死んでみせるんだ。放棄つといて呉れ。』

と、はつきり云つて、最後の力を揮ひおこしながら、いきなり片肱で半身起き上つて、今度は土手のところまでよろばひながら居坐り寄つていつて、お歌の腰のところへばつたりと掩ひ被さりながら、もう一度腹の底から出るやうな聲で呻めいた。

刑事達はそれをみると、皆なして島田をお歌の傍から引離さうとしたが、併しもう其時には島田は自分の軀の重みで、七首の柄をぐいッと深く突き入れたので、もう息もきれ〳〵になつて、

『おい、お歌、お歌、俺お前と一緒に行くんだ。さ、お歌、俺に手を握らせて呉れ。おい、お歌、きつと、きつと離れずに行くんだぜ。』と、氣も不覺になつて呟く。

お歌は先刻のまゝで、土手のうへから滑り落ちさうな格好をしながら、もう何をされても身動きもしなかつた。

刑事達もさすがに死んでゆく人間の一念に打たれて、少時の間手を束ねてみてゐた。

そのうちに三谷刑事は我に返つたやうに、

『おい、中村君、かうしても居れんから、とにかく二人を彼方へ連れていかうぢやないか。さう

し、大急ぎで警署醫に來て貰はんことには、僕等ぢや何うすることも出來んからな。さ、一人づつ彼方へ擔いでいかう。』と、いふ。

皆なもやがて側へ寄つて、先づ島田から先に抱き起した。そしてなるべく傷口へ無理のないやうに、そつと三人して力を併せて擔ぎ上げたが、併し島田はもう何にも云はずにぐつたりとなつて、されるがまゝになつてゐた。

三人の刑事はやつとのことで、島田を母家の緣端まで運んで來たが、もうその時には彼は顏色も鉛のやうになつて、ワイシャツはまるで縞目も分らないほど鮮血に塗れてゐた。

二十五の十一

刑事達はそのまゝ島田を緣端へ横に寢せて、なるべくそこいらに血の滴らないやうに、脊廣の上衣で始末をしたあとで、三谷刑事は、

『おい、中村君、それぢやこゝは君に賴むぜ。僕はもう一度彼方へいつて、田中君と二人で、あの女を此方へ運んで來るから。』と、云ひ捨てゝ、もう一人の刑事を促して、又現場の方へ取つて返した。

島田は緣端へ仰向けに寢たまゝもう身動きもしずに、唯うん〳〵かすかな聲で呻いてゐたが、その聲がふつと止んだかと思ふと、彼の顏には石彫の面のやうな奇怪な表情が現はれて來た。

そこへ三谷刑事は二人してやつとお歌の體を抱へて來たが、これも島田と頭と頭を突き合はせて緣端へ横に寢せられる。お歌もぐつたりと手足を投げだしたまゝもう身動きもしない。

中村刑事は手を拭いてゐる三谷刑事の方をみて、

『おい、君、どうも島田の奴あもう駄目らしいぜ。これ見玉へ、心臟の處を見事に遣つとるんだもの。』と、七首の刺つたところを指さしながらいふ。

三谷刑事も初めて明るい電燈の光で傷口を調べてみながら、

『うむ、此奴はえらい處をやつたな。さすがに我々を手古摺らした奴だけあつて、死ぬ時にや未練な態度はみせんなあ。』と、云つて、脈をとつてみながら、

『お、もう、脈も何もありやせんよ。これぢやとても醫者が來たつて駄目かな。』と、いふ。

後では田中刑事が頻りにお歌の傷口を調べてみながら、

『おい、此方も、もう駄目らしいぞ。脈もかすかだし、第一まるで呼吸をせんもの。それに少くとも十箇所以上はやられて居るから、出血でやられてしまふかも知れん。』と、いふ。

三谷刑事はそつちを向いて、

『いや、田中君、さう呑ん氣に構へて居つちやいかんよ。二階にもまだもう一人相川といふ重傷者が居るんぢやないか。まあ何は兎もあれ、大急ぎで警察醫に來て貰はふ。電話をかけるにも我れは手が放されんから、署の自動車の運轉手にさういふて、大急ぎで向島の派出所まで行つて貰はふぢやないか。』と、云ひながら、彼はそゝくさ庭先の暗闇を足探りに戸外の方へ出ていつた。

間もなく門のところで、自動車のエンジンの音が聞えて、やがてその車は土手の方へ駛つていくらしかつた。

三谷刑事が此方へ取つて返すと、三人は緣端のところへ立つて、一服やり出したが、島田もお歌も指先ひとつ動かさずに、漸次と恐ろしい死の色に掩はれていくらしいのが他眼にも分つた。

中村刑事は煙草の煙をぷうツと吐いて、

『いや、かうやつてみて居るのは焦悶かしいが、併し三人も重傷者があつちやどうにも手がつけられんなあ。島田だけでもどうかして生かして置かんけりや、あとで困るが……。』と、呟いたがその聲もしんとした家の内へ物凄く消えてゆくばかりであつた。

二十五の十二

その翌朝の八時になつて、お歌はふつと正氣づいた。と、みると、そこは眞白な壁で圍はれた西洋室で、カーテンを懸けた窓からは薄紅い朝日の光が一杯に流れ込んで、四邊は眩ぶしい位に明るかつた。お歌はその中で我れにもなくふつと眼を睜いたのであつた。

そこは淺草の駒形にある佐野といふ外科專門の大病院の病室のひとつで、お歌と相川は昨夕向島で附近の醫師の手當を受けると、自動車で眞つ直に此處へ運ばれて來たのであつた。島田はもう全く見込がないといふので、死體となつた彼はその夜のうちに警察へ引取られたが、二人はこの病院の大手術室で徹宵手厚い手術を受け、最後にやつた食鹽注射が利いて、やつと生命だけは取留られるだらうといふ見込みがついたので、そのまゝこの病室へ送り込まれたのであつた。そして醫員が一人と看護婦が二人附き切りになつて、いろ〳〵に看護をして呉れたので、彼女は全くのところ九死に一生を得て、再び今日の朝の光を見ることが出來るやうな幸運に際會したのであつた。

醫員はお歌が眼をあいたのをみると、疲れ切つたやうな顏に微笑を浮べて、

『お、やつと眼が覺めましたか。いや、こりや何よりだ。』と、さも嬉しさうに云つて、『ねえ、貴女、傷は可成重いが、もう生命は大丈夫ですから安心して被居い。それから彼方の方ももう先刻から正氣がついて、これも化膿せん限りは心配はないですから、どうか御安心なさい。』といふ。

お歌はまるで夢のやうな氣がして、何か云はふとしたが、胸へ息を吸入れると、體中が針の蓆に寢てゐるやうに耐らなく痛んで、口を利くことも何も出來なかつた。

醫員はそれをみると、手でそつと押へるやうに、

『貴女、まだ口を利いちや可けません。こゝ二日三日が一番大事な時ですから、出來るだけ安靜にしてゐなけりや可けませんよ。』と、やさしくいふ。

お歌にはその言葉がはつきり分つた。

とみると、すぐ隣にもう一つ寢臺があつて、そのうへにも白いシーツに埋まつたやうになつて、一人の男が寢てゐる。横眼でよくみると、それは相川で、彼も眼だけ此方へ向けながらじいツとお歌の顏をみてゐる。彼も肺を刺されたので、まるで口が利けないのであつた。

二人はさうやつて眼と眼を見合はせてゐるうちに、熱い嬉し涙がぽろ〳〵流れて來た。いくら押へようと思つても、涙は留度なく流れて來て、いつかしら相手の顏もぼうッと光の泡のやうに

見えなくなつてしまふ。

二人にとつてはその涙こそ一生涯に二度再び味はふことが出來ないほど尊いものであつた。その時の再生の歡びも亦、人間が稀にしか味はふことが出來ないほど深いものであつたに相違なかつた。

河岸に臨んでゐるその病院の庭先では、河波の音が戲れるやうに明るく聞えてゐた。朗かな空には大きな柳の樹がみえてゐて、さら〳〵と風に靡くその垂枝にも、朝日の光りが美しく躍つてゐた。お歌は一生のことが眼の前にあるやうな氣がして、窓硝子に觸れるその柳の糸を涙に濡れ輝いたその眼でじいッと瞻つてゐた。

——〔完〕——

大正十三年六月十八日印刷
大正十三年六月廿一日發行

著者檢印

（柳の糸）奥附 定價金貳圓五拾錢

著者　長田幹彦
發行者　宮川敬三　東京市小石川區駕籠町百九十六番地
印刷者　谷口熊之助　東京市牛込區早稻田鶴卷町四〇三番地
印刷所　東京國文社　東京市京橋區宗十郎町十五番地

發行所　合資會社　中央堂　東京市小石川區駕籠町百九十六番地
電話小石川一四七　振替口座（東京六七〇九貳）

1145
~10

終